ISSN 1348-8139

News Letter 2009.7 No.22

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

CONTENTS

持続と変容の実態の研究―対馬 60 年を事例として 対馬調査報告

天道山登山の記……橘川　俊忠……2
対馬の林産業に関する一次資料の調査の必要性について…本田　佳奈……4
対馬鰐浦集落にみる集落図・地籍図……津田　良樹……7
第二回対馬調査報告書 ……磯貝奈津子……9

非文字資料研究ネットワーク形成研究

ハイデルベルグ大学の学際的共同研究プログラムと大学院教育
……金　貞我……11

第 3 回公開研究会 報告

震災復興と文化変容 ―関東大震災後の横浜・東京―……14

第 4 回公開研究会 報告

租界研究の新しい可能性を探る ―上海シンポジウム―　……20

コラム

《都名所图会》所引汉诗文之管窥　……沈 少 康……26

■ 2009 年度　センター研究員・研究協力者　■ 2009 年度　個人研究課題一覧
■ 2009 年度　奨励研究者決定　受贈資料一覧（書籍・雑誌)(2008 年 4 月～ 2009 年 6 月）
■ホームページ INFO 「海外神社（跡地）に関するデータベース」……27
■主な研究活動 ……31
■Information ……32

持続と変容の実態の研究―対馬60年を事例として

Report 共同研究

対馬調査報告

天道山登山の記

橘川　俊忠（非文字資料研究センター 研究員）

天道山に登る

山道を登りながらこう考えた。山は変わらないものの象徴であるが、本当に山は変わらないのだろうか。火山であれば噴火や、そうでなくても地震・大雨などによる崩壊、石灰岩や岩石の採取あるいは伐採・植林という人為的営為などによって、山の姿は大きく変わることもある。しかし、山は一般的には変わらないもの、「悠久の自然」の代表であると信じられてきた。とくに、その山が信仰に関わる山であればなおさらである。だから、人間の一生という時間に比べればはるかに長い時間がかかるとしても、現実には確実に変わっていく山、そこに「悠久の自然」を見ようとするのは、あくまで人間の側の「変わらないもの」を求める願望の反映でしかないのではなかろうかと。

「持続と変容」をテーマとする今回の対馬調査では、まず「持続するもの」をはっきりさせ、その上で変容の諸相を明らかにしようと考えた。そこで、「持続するもの」＝変わらないものの象徴である山を調べてみることにした。とくに信仰の山に登ってみることにした。対馬の信仰の山はいくつもあるが、中でも天道信仰の霊地である天道山（別名竜良山）はその代表的な山である。そこなら変わらない山の姿があるだろうという思いで、3月20日登山にかかった。

朝8時、宿の車で登山口まで、山の中腹を回る林道を走った。途中天道大神を祀る神社に参拝し、その先にある登山口から入山し、宿の若主人の案内を得て登りにかかった。そこから北西に向いた上部一帯は「竜良山原生林」として今では自然保護地区になっており、鬱蒼たる原生林が続いていた。しかし、案内板によれば、そこの最も古い木は樹齢160年だという。原生林によくある倒れた巨木もない。どんな原始林も世代交代を繰り返すものである限り、巨木が残っていないことは、その樹林の原始性を、必ずしも否定するものではない。だが、その逆もありうる。

そんなことを観察しながらさらに登っていくと、登山道は浅藻に向かって南東に下る道との分岐に達し、暫時休憩後北東方向の頂上を目指して、少し勾配のきつくなった登山道を登った。暫く登ると樹林は潅木帯に変わり、汗がじわっと滲み出てくるころ、露岩の頂上に到達した。

浅藻集落より天道山を望む

頂上にて

頂上は露岩となっているため眺望は抜群であった。北側は内山の谷筋を挟んで対馬最高峰矢立山を中心に幾重にも重なる対馬の山並み、南側は、直下に豆酘内院、浅藻の集落とそれに接続する港湾、そしてその向こうに広がる玄界灘、東西には天道山もその一部となっている緩やかに起伏する長い稜線、360度さえぎるもののない眺望が得られた。そのすばらしい眺望を楽しみながら、ちょっと早めの昼食をとり、やおら観察に取り掛かった。

周囲の山々は、3月にもかかわらず緑に覆われていた。もともとタブやスタジイ、樫等の常緑樹が多いこともあるが、その樹相は、大部分杉・檜の人工林であることが見て取れた。とくに矢立山を中心にした一帯は、伐採されたばかりであるらしく、枯れ草色の斜面が頂上近くにまで広がり、その中を大きなジグザグを描いて林道が頂上付近にまで達していた。聞けば、そこはかつて焼畑が行われていた場所だという。山の形は太古から変わらないとしても、表面を覆う樹相は何回もの変遷を重ねてきたようである。

海岸線に目を転じると、湾を限る岬の突端部は、緑で覆われ、岩礁に白い波が砕けているが、湾内の海岸はどこもコンクリートの護岸が作られ、その一部には立派な港が築造されている。頂上からでは確実にとらえられないが、係留されている船はそれほど多くはない。出漁中かもしれないが港の立派さだけが目立つ。港の立派さが目立つのは、集落の規模との関係かもしれない。そう言えば、対馬の人家のある入江という入江は、ほとんど護岸が築造されており、自然海岸はそこには残っていなかったようだ。築造された護岸の内側に人工砂浜さえ作られている所すらあった。

下山

たしか平泉澄の著書では、天道山は双耳峰となっていたが、どこがそうなんだろうかと頂上付近を探索したが、どうもそれらしい地形は見当たらなかった。そんな疑問を抱きながら下山にかかった。前日の雨で滑りやすい山道を、慎重に下って一時間半ほどで元の登山口に到着した。まだ日暮れまでには時間があるので、山の反対側の浅藻に回って八丁郭に行ってみることにした。再び宿の車に乗車し、山裾を回り込み、豆酘の町を抜け、浅藻の集落を目指した。豆酘の町からは、天道山は前衛の山に隠れ、直接見ることはできない。

豆酘の多久津魂神社は、天道山を御神体としており、神社はその遥拝所と聞いていたが、見えないというのも不思議な感じがした。

浅藻にて

浅藻は、天道法師ゆかりの地とされ、かつては人家は無く、近代になって移住者によって形成された集落だという。そのためか、あまり古い家屋は見当たらず、人口もそれほど多くはなさそうであった。浅藻から見る天道山は、谷の最奥にそびえ、左右均整の取れた秀麗な姿を見せていた。集落を抜けて、天道山の懐にある八丁郭の見学にでかけた。八丁郭の周辺は、公園風に整備されており、入口には立派な鳥居が建てられており、その傍らに黒御影石の石碑があり、そこに「八丁郭由来記」と「自叙伝」と題する文章が刻まれていた。その「自叙伝」は次のように書かれていた。

自叙伝　御嶽教対馬天道教会准教正山下雪

顧るに私の母は神の信仰心の篤い人であった私は年十二才にして母の信仰実践に心をひかれ自も神を敬う心の芽生を感得した爾来私は只管神信心に徹することになった昭和十五年三十才にして渡満し山下吉雄氏と結婚在満中霊感に依り様々な予言が適中し戦事下の日本官憲のおとがめを蒙る等の事も屡であった。昭和二十一年久田村瀬に引揚げ木曽御嶽教に入り更に八丁角天道大神霊地に鎮座まします天道法師の古跡が放置された侭一般人の入山が「タブー」とされて居った。昭和三十六年一月吾に夢ありて「汝われの前に麦種子を持ち来れ」と私は之将しく天道法師の神啓なりと自覚し神啓に従い来り天道法師聖霊を礼拝し茲に発心して八丁角天道大神霊地開顕を神業と心得て霊力を注いだのである。昭和五十五年十一月多年に亘る神業報いられ拝殿の建設神前公園の造成概ね整いたるに依り天道大神霊地顕彰の碑を建立し吾無き後の世と雖も観音の化身として現れ給う天道法師の信仰に徹し拝ろがみ奉りて尊い御神護を拝戴される人々の多からんことを祈る　　敬白

（原文のまま）

たしかに、碑文の通り、八丁郭の周辺は整備されており、拝殿が建てられ、祭壇も設けられるなど、以前の様子とは相当変わっていると想像された。天道山の山容は変わっていなくても、信仰の在り様はけして以前とは同じではない。

持続しているかに見えるものの中に変容しているものを探り、変容しているもののなかに持続しているものを発見しようとする我々の研究は、やっと始めたばかりであるが、天道山の環境と信仰の在り様は、そうした考察を進める上で、貴重な素材を提供してくれている。予備調査の段階から本格調査へ進展させるに当たって、重要な課題に到達したことを自覚しながら、夕暮れ迫る中、浅藻をあとにした。

対馬の林産業に関する一次資料の調査の必要性について

本田　佳奈（非文字資料研究センター　研究協力者）

はじめに

昭和 25 ～ 6 年におこなわれた九学会連合対馬共同調査では、言語・考古・人類・地理・民俗・社会・宗教学などの研究者が戦後まもない離島僻地・対馬に渡り、額に汗して当時の島のありかたを記録した。しかし成果報告書『対馬の自然と文化』には林産業に関する記述が著しく低い。そこで対馬における近現代の林産業について幾つかの事例を挙げ、一次資料調査の必要性について述べてみたい。

Ⅰ．平泉澄（きよし）が見たアジールの光景

(1) 大正８年の官山天道山（てんどう）

対馬の南端部豆酘（つつ）・浅藻（あざも）地区に後背する龍良山（たてら(たつら)やま）（通称天道山）は、島固有とされる天道信仰の聖地である。山の南北の麓にはそれぞれ石積みの塔が立ち、表八丁郭（おもてはっちょうかく）・裏八丁郭と呼ばれている。来島する研究者必見の地となっている（写真１）。九学会調査でもこの天道山は豆酘の赤米（あかごめ）神事やシゲ地（人畜の出入や土木を禁じる場所）の事例とともに紹介され、大きな調査成果のひとつとなっている。

さて、九学会調査より遡ること 30 年前の大正 8 年春、この天道山を目指して一人の歴史学者が来島した。のちに狂信的な皇国史観の提唱者として太平洋戦争期の政治思想に多大な影響を与え、戦後の歴史学界から憚られることとなる平泉澄の若き日の姿である。当時の平泉は東京帝国大学国史学科を主席で卒業し、同大学院へ進学したばかりだった[i]。『海東諸国記』にある天道山と推測される一文「島の南北に高山あり。天神と名づく（中略）罪人神堂に走入れば則ち亦敢て追捕せず」に日本最古のアジールを見いだし、現地調査に赴いたのである。彼はその様子をこのように描いている。

「予がこの森に入ってこの石壇の前に立ったのは大正八年五月十三日の最早暮近き頃であった。古来嘗て斧を入れぬ樫の密林は鬱葱として殆んど天日を見ず、木は千年を経て自然に倒れ朽ち、落ち葉は地に堆（うずたか）くして深く地に没した。怪鳥の声、幽谷の響、聞くものすべて物凄く、壇前に立つて四顧する時、鬼気の直ちに迫り来たるを覚えた。これは決して尋常の墳墓ではない」[ii]

眼前に聳える累石壇とそれを包み込む古色蒼然たる太古の森。春の夕暮れの匂い、土の柔らかな感触。読み手の五感に訴える文章であると同時に神秘的であり禁忌の迫力に満ちている。それが後年の平泉を髣髴とさせるためであろうか。この描写は戦後華々しく展開されたアジール論の「はじまりのものがたり」だったにもかかわらず、ほとんど引用されることがなかった。わたし自身もこれまで幾度か両八丁郭に入った。怪鳥の声は勿論、「聞くものすべてが物凄い」こともなかった。スダジイ林の林冠から光差す静かな山中であり、天道信仰を持つ人々の崇敬と近隣住民の敬意によって守られた聖域という印象だった。この一文は実証史学から乖離して行く平泉の道程の始まりだったのか。それとも、当時の表八丁郭は本当にこのような恐ろしげな森であり、平泉の特異な感受性がそれを受取ったのだろうか。

(2) 龍良国有林323林班という別名

天道信仰の聖地であり、アジールとして知られた天道山だが、龍良国有林 323 林班という別名を持つことはあまり知られていないのではないだろうか。

明治 7 年、全国の山林を官有・民有林に区分する事業がスタートし、紆余曲折を経て広大な山林面積が官有地へ編入された (官民有区分)。しかし私的所有林野が官有地へ編入される場合も多く、国有林での入会慣行も禁止された。山に生きる地域住民は様々な不利益を蒙った。各地で暴動・皆伐が行われ、官有林を管轄する山林局には大量の嘆願書が提出される事態が続いた。このような不満が噴出していたものの、山林局は長大材と官行製炭業の増進を急務とした。明治 39 年に開始された官行斫（しゃくぱつ）伐事業は全国に展開し、永く保有されてきた奥山の巨樹・巨木林は次々と伐り明けられていった[iii]。

対馬も例外ではなかった。藩有林野であった天道山は官有林へ編入され、明治 23 年には 321 ～ 325 林班の境界が確定した。8 年後の明治 31 年には豆酘・浅藻担当区（管理をおこなう営林署の出張所）が開設しているので[iv]、おそらくこの頃から伐木・官行製炭がはじまったのではないだろうか。また平泉がアジールと見なした表八丁郭付近は、明治初年から周辺の官有林が払い下げられ、第 1 期の開拓者が入植していた[v]。昭和 25 年には朝鮮人の炭焼小屋も裾野に広がりつつあった[vi]。官行製炭業は昭和 27 年ごろに終焉したようで、そのころには天道山一帯に炭焼き小屋、山中からの搬出路、木炭倉庫、営林署の出張所、出荷港が完備されていたという[vii]。323 林班が国指定の天然記念物龍良山原始林として正式に伐採地から免れたのは、平泉の来島から 4 年後の大正 12 年だった[viii]。

写真１　表八丁郭の累石壇
昭和 25 年当時は才塔と呼ばれていた。（『対馬の自然と文化』408 頁）

(3) 切り取られた光景

以上のような事柄を付加すると、大正 8 年の天道山の姿はより広い風景として現れる。平泉澄は長旅の果てに厳原港にたどり着き、難所の嗚呼難儀坂（ああなぎさか）を登って雄大な龍良山系を越え、内山村の盆地に到り、『海東諸国記』で神山と謳われた天道山をようやく目にすることができたはずだ。しかし、山は製炭経営のさなかにあり、伐採が始まった林班では山肌が露出し、炭焼窯の煙が立ち昇っていた。平泉が投宿したであろう豆酘にも官山関係者で賑わい、表八丁郭のある浅藻は周辺の山林が切り開かれ、開拓者が入植していた。石壇のまわりだけはかろうじて神聖な雰囲気が漂っていた。

この描写は先行研究上に点在する天道山の情報とわたし自身が前回の調査でおこなった聞き取りの寄せ集めに過ぎず、まだまだ修正の余地があるだろうが、大筋ではこのようなものと考えられる。平泉は天道山をどのようにとらえていたのだろう。学究に燃える青年は山林大変革にさしたる関心を持たなかったのか。それとも白山信仰を旨とする平泉寺神主の子息として、神山が近代的大儀のもとに拓かれる様子に心を痛めたのか。その心境は不明であるが、彼が描いたアジール八丁郭の姿は官山天道山を非常に狭いアングルで切り取った光景だったことに間違いはない[ix]。

従来の対馬研究史において、60 有余年に及んだ官山経営については詳しく言及されることはなかった。また九学会調査ではインテンシブ調査の最重要地として豆酘が選ばれ、民俗・宗教・言語・人類学の研究者が投入されているが、当時かろうじて存続していたはずの官営製炭業については報告がない。興味を引く対象ではなかったのだろうか。厳しいタブーの地であった浅藻が明治８

年より再び拓かれた理由については、山口県周防大島久賀出身者たちが豆酘の難破船を救け、そのお礼として、「生き神さま（明治天皇）が治める時代になったのだから、天道法師も悪さはしまい」ということで浅藻の居住を認められた、という縁起絵巻のような物語がひとつだけ残されている[x]。これは海から見た天道山の歴史である。山から見た歴史、つまり官山経営や官民有区分といった山林大編成に沿って、天道山の様相をあらためて捉えなおす必要がある。

Ⅱ．対馬の林産業の歴史

(1)『対馬の自然と文化』での林産業の記述

対馬の海岸線に沿って点在する 100 以上の各集落では、古くから農・林・水産業の混合形態が営まれてきた。しかし『対馬の自然と文化』を読むと、漁業調査を主とする研究が目立つ（「対馬の漁業展開」「海の労働慣行」あるいはインテンシブ集落調査成果である「鴨居瀬（かもいせ）及び周辺地域の村落組織」「豆酘」「鰐浦ムラ」）。林産業の実態については簡単な報告が各論文に差し込まれる程度であり、集落の社会構造や漁業慣行などのそれに比べると、著しく情報量が低い（農業については渡辺兵力が豆酘の在来農法を調査したが『対馬の自然と文化』には未掲載）[xi]。

(2) 対馬の焼畑のユニークさ

では対馬の林産業がそれほど重要ではなかったのか、というと決してそういうわけではない。山林は島土の 80 パーセント以上を占め、焼畑式農業（通称木庭（こばさく）作）による食糧と山林資源の循環的生産がおこなわれていた。島の表土は頁岩で覆われており、十分な水分や養分を保つことができなかった。山の開発による田畑面積の拡大が適わず、木庭作が重要な食糧生産地であった（田畑の耕地面積は最大３パーセント）。中世の古文書にも木庭作の様子を伺うことができる。また近世においては農本主義を推進させ、害獣である猪を全島から駆除し、木庭を拡大させたことも知られている。藩の農政学者陶山訥庵の「老農類語」「刈麦談」（享保７年）「木庭停止論」（同十四年）には、島内各地の木庭作の多様な実況報告と老農たちの知恵と意志が豊富に記録されている。

対馬の木庭作はその第一の目的をムギとした。これについて佐々木高明は、雑穀・根菜型を主流とする日本の焼畑式農業とは異なる伝播系統を指摘している[xii]。また対馬の木庭作のもうひとつの特徴は木庭と牧の要素が融合した点である。昭和８年、弘長務は今里において大規模な牧畑の存在を確認した。当時対馬は要塞であったため、島内の自由行動、写真撮影、地図利用には厳しい制限が加えられていたものの、弘長は全島に牧畑が存在する可能性を示唆している。『海東諸国記』の「島主の牧馬場は四所にして二千余匹を可（い）る」という記述を髣髴とさせる事例報告である[xiii]。

九学会調査がおこなわれた昭和 25 年は、このような興味深い事例を秘めた山とその担い手がまだ健在であり、明治 30 年代に絶えたとされる木庭作も戦中戦後の食糧難によって復活していた。最終的に木庭が止んだのは昭和 35 年ごろであるという[xiv]。実態調査には絶好の機会であった。しかし各集落に存続していたオヤカタ、ソシ、ナゴ、ヒカンなどの封建的身分制度や本戸・寄留といった村落の社会構造のあり方は、当然のことながら研究者たちを驚かせ、その詳細な事例調査のほうへ力が注がれた。かといって彼らが全く農林産業に関心がなかったわけではなく、「木庭作法（焼畑）、切替畑法（古い輪作法）、牧畑法などの土地利用形態は古い農業の型を示す代表的なもの」「対馬住民の生活組織は農業的構造を基盤として成立していて、その上に漁業のいろいろの方式が乗っかっているというところに一つのかぎがあるのではないか」といった意見も述べられている[xv]。

しかし当時の対馬は交通網の整備が著しく遅れ、難所の多い山中や海路を往かねばならなかった。調査日数を有効に使うには、集落内での調査が最適だったともいえる。奥山の現地を観察する木庭調査はどれほどの労力と時間を要したであろうか。先述の弘長、折茂、佐々木、渡辺らは調査精度の不十分さを述べているが、実際には相当な苦労の末の木庭報告であったと思われる。林産業の研究を阻んだものは山そのものだった。

おわりに

対馬の大きな土台であり歴史と文化の基層である山林の姿は、わたしたち人文科学の研究者には次第に見えづらいものとなっている。林産業資料の調査と記録は急ぐべき課題である。国有林については豆酘・浅藻担当区が調製した測量野帳、官行製炭の経営記録、払い下げ地に関する記録といった一次資料の調査が必要である。民有林については個人所蔵の資料（たとえば境界確定のための立会通知書、不要存置国有林野売払願、売渡通知書・証書・農業日誌など）、区長日誌などの区有文書、木庭の火入れ許可証、旧島庁時代の林政資料の調査も必要となるであろう。幸いにも平成 20 年８月の現地調査では、終戦直後から営林署勤務を経験された桟敷原久助氏（昭和３年生）と面識を得、営林署についての基礎知識や戦後の営林署の状況など様々なご教示を頂いた。この場を借りて御礼を申し上げたい。

---

i　若井敏明『平泉澄―み国のため我つくさなむ―』ミネルヴァ書房　平成18年　29～32・330頁
ii　平泉澄『中世に於ける社寺と社会との関係』至文堂　大正15年
iii　船越昭治編著『森林・林業・山林問題研究入門』地球社　平成11年　62～66頁／『国史大辞典』第5巻（「国有林」「国民有区分」の項）
iv　桟敷原久助氏の御教示と氏の私家本『対馬の林業―時代の流れ　今・昔の歩み―』『対馬営林署のあゆみ』平成20年
v　宮本常一『対馬漁業史』未来社　昭和58年　300頁
vi　九学会連合対馬共同調査委員会『対馬の自然と文化』古今書院　昭和29年　378頁
vii　桟敷原氏のご教示による。
viii　厳原町誌編集委員会『厳原町誌』平成9年　47頁
ix　ここでの本題とはそれるが、平泉が対馬アジール調査をおこなった大正8年、東大史料編纂掛にはイェール大助教授の朝河貫一が滞在していた（大正6～8年）。比較法制史を専門とする朝河は鹿児島県入来院で史料調査をおこない、大正14年に代表作『入来文書』を発表した。その翌年、平泉は彼の皇国史観の礎たるべき三部作『中世における精神生活』『中世に於ける社寺と社会との関係』『我が歴史観』を発表した。二人は大正アカデミズムのエリートであり（朝河は東京専門学校[現早稲田大学]を首席卒業）、世界における日本のあり方を強く意識していたが、その歴史観と政治活動は対極にあった。朝河は「熱なき光を」をモットーとして世界史の中の日本の姿を客観的に位置づけようと試み、平泉は「冥々の力」と精神性を日本の歴史に求めた。しかしながら両者のもっとも重要な研究が同時期・同じ場所で進行していたことは興味深く、近年両者の研究に対する再評価が進んでいることも附言したい（矢吹普2005-2007；若井俊明2002-2005；佐藤雄基2009）。
x　宮本常一『忘れられた日本人』岩波文庫　昭和59年　182頁
xi　『人文』1－1　日本人文科学会　昭和26年　11頁
xii　佐々木高明『日本の焼畑』古今書院　昭和47年　261～271頁
xiii　弘長務「対馬の牧畑」『嶋』1－1　一誠社　昭和8年／折茂順平「対馬の焼畑（木庭）」『京都学芸大学学報』第1巻　昭和26年
xiv　『人文』36頁／陶山訥庵『老農類語　刈麦談』農文協　昭和55年　6頁
xi　『人文』149・208頁

対馬鰐浦集落にみる集落図・地籍図

津田　良樹（非文字資料研究センター　研究員）

鰐浦の町並

鰐浦は対馬の最北端に位置する漁村集落である。北に開く入り江の奥、谷筋の小河川に沿って集落は展開している。海岸縁りにやや広い広場（ベェー[1]）を開き、各戸の高床の小屋（倉）群を円弧状に山側に沿って建てる。それとは別に主家は小河川に沿って軒を接するように帯状に配されている。

集落図

このような密集する漁村集落の骨格を把握するためには地図上に各戸の家屋などを配置した図（以下、このような図を集落図と呼ぶ）の作成が有効であると思われる。

昭和 25・26 年に実施された戦後最初の九学会連合対馬調査では調査をした集落ごとに集落図が作成されている[2]。

鰐浦の場合を例（図１）に集落図の内容をみてみよう。

図１　『対馬の自然と文化』所収の鰐浦の集落図

海・小河川・道の略図が描かれ、四角く囲んだ主家らしきものを本戸と寄留者に分けて描き、寄留者には職業なども記号化して示している。また、小屋・余間・井戸・墓地・寺社を示し、ベェー・畑などを含めて模式的に示している。現地の観察や聞き取りを元に作成されたものと思われるが、よく出来た集落図である。しかし、模式図が描かれるのみで、残念ながら、図をもとにした分析はあまりなされていない。

その後も集落図は集落の骨格を把握する有効な手法だと判断されたとみられ、鰐浦調査ではたびたび九学会連合の調査の図をもとに、ほぼ同様な集落図が作成されている[3]。また、九学会連合調査以降に対馬で独自に行われた調査[4]でも集落図が作成されている。対馬においては民俗誌調査のなかに集落図作成が定着しているようだ。

一方、九学会連合が実施したその後の能登調査や下北調査などでは集落図が作成されることはない。九学会連合の調査のなかではなぜか受け継がれることがなかったようだ。

集落図の作成は、実測し精度の高い図を作成するにせよ、観察・聞き取りなどによりある程度模式化された図を作成するにせよ、極めて手間隙のかかる作業を伴う。にもかかわらず、集落図を利用する方法論がいまだに曖昧なために、積極的に活用されていないのであろう。

図２　鰐浦新公図
縮尺１/500 の精度の高い実測図。地番が記入されるだけで、地目などの記入はない。

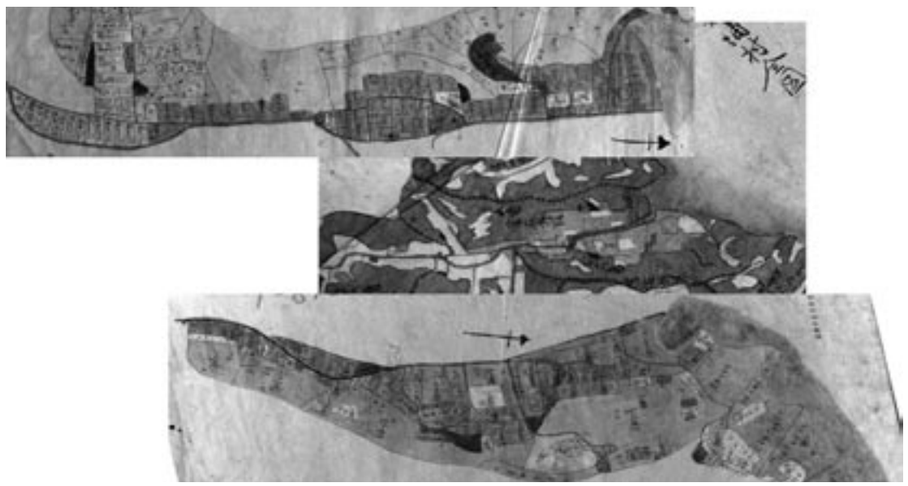


図３　鰐浦旧公図
中央が「全図」、上の図が「在所陽」の小字図、下が「在所陰」の小字図。本来、両小字図は齟齬なく接続するはずだが、うまく接続しない。旧公図は実測図でないためである。地図としては新公図はど精度は高くないが、地目別に色分けされるなど情報量は多い。

地籍図（公図）

集落図に近い資料に地籍図（公図）がある。土地に刻まれた歴史の解読に有効な公図が、九学会調査ばかりでなく、以降の調査においても、なぜか対馬の調査ではほとんど使われていない。

鰐浦を例に以下にその公図を見てみよう。鰐浦の公図は大きく分けて新旧２種がある。最新の公図は測図と称され、1996 年の実測調査をもとに縮尺 1/500 で描かれている（図２）。一方、旧公図は作成年代が必ずしも明らかでないが、明治期の絵図が元になっていると思われる[5]。新公図のように実測をもとに作成された図ではなく、地図としては精度が落ちるが、地目別に色分けされ、相対的位置関係などは信頼できる（図３）。また、新旧ふたつの公図の間には、旧公図の変更箇所を部分的に修正した副図と称される図が数枚作成されている。これらによって土地の推移を時系列に追うことも可能である。

紙面の都合上、海沿いのベェーおよび小屋群の部分に限って新旧公図を比較してみる。旧公図では該当部分は当初から地目は宅地で、比較的大きないくつかの区画で区切られていることがわかる。一方、新公図を見ると小屋群部分は小屋ごとに区画が細分化され、ベェー部分も各戸の持分ごとに分けられているようだ。かつて集落の共有地であったベェーや小屋の敷地が個人の所有に変わったであろうことが読み取れる。新旧ふたつの公図を比較するだけでも、以上のような点が確認できるのである。

おわりに

「持続と変容の実態の研究―対馬 60 年を事例として」では、九学会連合の調査による集落図をはじめとする情報に新旧の公図や土地台帳・登記簿をあわせることによって、実りある成果を上げたいものと考えている。

註

1　共同作業場
2　『対馬の自然と文化』九学会連合対馬共同調査委員会、古今書院、昭和29年9月。なお、この報告書に先立って、1年目の調査が終わった段階で出された『人文』（1、日本人文科学会、昭和26年5月）の「特集・対馬調査」の「対馬の文化」のうち泉靖一担当分「豊崎町鰐浦ムラの構造」に収録された集落図が、対馬調査のおける集落図の先駆けとなったものと思われ注目される。
3　「民家にみる生活空間の変容―対馬・鰐浦において－」（関根康正『環東シナ海文化の岸構造に関する研究―壱岐・対馬の実態調査』昭和54年度）、「鰐浦の集落構造」『離島の建築』（淺川滋男、日本の美術、Ｎｏ.406）などに収録された鰐浦の集落図はいずれも九学会連合調査の集落図をもとに作成されている。
4　地元の研究者永留久恵他による『対馬西岸阿連・志多留の民俗』（長崎県教育委員会、昭和48年3月）。
5　佐藤甚次郎『公図　読図の基礎』古今書院、平成8年9月。

第二回対馬調査報告書

磯貝奈津子（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　博士後期課程１年）

2009 年３月 17 日から 21 日までの５日間、第二回対馬調査を行った。今回の調査の目的は、対馬各地域の地籍図や行政データを集めることであった。あらかじめ調査地点を大まかに、鰐浦・志多留・木坂・廻・豆酘・鴨居瀬・厳原と決め、それぞれの地区についての情報やデータを、市役所、旧町役場（現地域活性センター）、また図書館にて収集する計画を立てた。

まず、調査初日に厳原の対馬市役所へ行き、建設部管理課にて「旧厳原町道路図」を閲覧した。これは、厳原旧城下町の絵地図を撮影・プリントアウトしたものである。また、CD-ROM「対馬市庁管内基本図・林班及び正射図」（厳原町、 平成 15 年５月対馬市庁林業部森林土木課扇精光）を見せていただいた。これは、森林基本図に林班、空中写真を落とし込んだデータである。今回は閲覧しか叶わなかったが、今後の活動のために是非とも入手したい資料であった。

続いて訪ねた法務局対馬支局では、新しい地籍図を閲覧・複写及び撮影できたため、翌 18 日もかけて鰐浦・木坂・廻・志多留・峰分の閲覧を申請、撮影・複写を行った。この日はその後、厳原から途中、阿連、豊玉を通り、比田勝まで移動した。

19 日、上対馬地域活性センターに赴き、旧上対馬調整要覧について尋ねたが保存版はなかった。但し、鰐浦の家屋台帳を申請すれば閲覧できることが分かった。その後、鰐浦地区を見学し地区全景を撮影してから、上県地域活性センターへ向かった。ここでは、旧町時代の町政要覧を閲覧することができた。また、志多留の家屋台帳閲覧についても、先と同様、申請すれば可能というこ

とだった。午後、峰地域活性センターで、峰町の町政要覧を閲覧、また、「峰町略集成写真図」（平成４年 7500 分の 1）の一部を撮影した。

この日は最後に佐須の出張所（旧佐須村役場）を訪ね、初日に依頼しておいた阿連の旧土地台帳を閲覧した。この土地台帳は、最も古い登記年が昭和 30 年代であった。出張所の前身である旧佐須村役場が昭和 31 年に火事で焼失したことが関係するのか、また、この台帳に関連する旧村役場書類の所在も不明であり、阿連の旧・現地籍図と旧土地台帳の照合は困難であることが分かった。今後、入手した地籍図を整理し、改めて旧土地台帳との照合を行うことが課題のひとつとなった。豆酘へ移動し、翌 20 日、竜良山を登り、表八丁郭、豆酘崎を見学した。

最終日は、豆酘の集落を散策するとともに、主藤家の家屋を見学させていただいた。その後厳原に移動し、県立博物館を見学した。

今回の調査で閲覧、入手したものは以下になる。地籍図など対馬の基礎的な資料の存在を確認でき、調査の目的を果たしたことはもちろんだが、今後の研究のため、また次回の調査に向けても、非常に大きな収穫を得ることができた。

（1）書籍

①豊玉町役場総務課『広報とよたま　縮刷版』第一巻　松古堂印刷株式会社　平成13年

②豊玉町役場総務課『広報とよたま　縮刷版』第二巻　松古堂印刷株式会社　平成15年

③豊玉町役場総務課『広報とよたま　縮刷版』第三巻　松古堂印刷株式会社　平成16年

④豊玉町誌編纂委員会『豊玉町誌』豊玉町役場　㈱昭和堂印刷　平成４年

⑤峰町誌編集員会『峰町誌』峰町　第一法規出版株式会社　平成５年

（2）資料

①対馬市役所「対馬市市勢要覧」平成18年　㈲オフィスわく　（二冊）

②豊玉町役場企画情報課編集「豊玉町町勢要覧」1998年　㈱昭和堂印刷

③上県町役場総務課「’97上県町勢要覧」1997年　㈱昭和堂印刷

④上対馬町役場総務課総務係「1999上対馬町町勢要覧」1999年　㈱昭和堂印刷

（3）その他

①公図　法務局複写申請分

公図　法務局複写申請分

字名	番号
豊玉町廻字廻	176
上県町志多留字茂	205
上県町志多留字瀬滝	273
峰町木坂字在家	281-1
峰町木坂字タカイノ口	247
上対馬町鰐浦字豊内河内	836-1
上対馬町鰐浦字在所陰	513-1
上対馬町鰐浦字在所陽	973-1

旧版公図　複写申請分

字名	番号
上対馬町鰐浦字在所陽	974-1
豊玉町廻字廻	176
上県町志多留字瀬滝	273
上県町志多留字茂	205
峰町木坂字在家	281-1
峰町木坂字タカイノ口	247
上対馬町鰐浦字豊内河内	836
上対馬町鰐浦字在所陰	513
厳原町阿連字久奈	187
厳原町阿連字大栗	240-1
厳原町阿連字軍明	344
厳原町阿連字湊	664-1
厳原町阿連字在家	366
厳原町阿連字在家	473-1
厳原町阿連字在家	631-1

②公図　法務局閲覧分

町名	番号	調査年月	測図年月	縮尺
上県郡峰町	T55			
上県郡峰町	U51	1995.9	1996.2	1：1000
上県郡峰町	C′ 25	1996.9	1997.2	1：1000
上県郡峰町	U51	1995.9	1996.2	1：1000
上県郡峰町	C′ 25	1996.9	1997.2	1：1000
上県郡峰町	D′ 21	1996.9	1997.2	1：1000
上県郡峰町	D′ 21	1995.9	1996.2	1：1000
上県郡峰町	D11	1996.9	1997.2	1：1000
上県郡峰町	D′ 11	1995.9	1996.2	1：1000
上県郡峰町	D′ 11	不明	不明	1：1000
上県郡峰町	C′ 15	1996.9	1997.2	1：1000
上県郡峰町	C′ 15	1995.9	1996.2	1：1000
上県郡峰町	T55	1995.9	1996.2	1：1000
上県郡上対馬町	L12－4	1996.10	1997.2	1：500
上県郡上対馬町	L22－2	1996.10	1997.2	1：500
上県郡上対馬町	L22－4	1996.10	1997.2	1：500
上県郡上対馬町	L12－2	1996.10	1997.2	1：500
上県郡上対馬町	L13－1	1996.10	1997.2	1：500
上県郡上対馬町	L13－3	1996.10	1997.2	1：500
上県郡上対馬町	L23－1	1996.10	1997.2	1：500
上県郡上対馬町	L23－3	1996.10	1997.2	1：500

③公図　対馬市庁税務課分（複写申請はしていない）

字名	番号	再製年月日	縮尺
下県郡厳原町阿連全体図			
下県郡厳原町阿連全体図字在家（一）			縮尺なし
下県郡厳原町阿連全体図字在家（二）	18	1978.2.10	縮尺なし
下県郡厳原町阿連全体図字在家（三）			縮尺なし
下県郡厳原町阿連全体図字在家（四）	19	1978.2.10	縮尺なし
下県郡厳原町阿連全体図字軍明	17	1978.2.10	縮尺なし
下県郡厳原町阿連全体図字大栗			縮尺なし
下県郡厳原町阿連全体図字瀬戸原			縮尺なし
下県郡厳原町阿連全体図字湊			縮尺なし
下県郡厳原町阿連全体図字久奈	10	2.10	縮尺なし

非文字資料研究ネットワーク形成研究

Report 共同研究

ハイデルベルグ大学の学際的共同研究プログラムと大学院教育

金　貞我（非文字資料研究センター　研究員）

非文字資料研究センターの基幹研究の一つである研究ネットワーク形成班は、21 世紀 COE プログラムの研究成果を継承し、世界的な非文字資料研究の中心になるための研究ネットワーク形成を目指し、活動をつづけている。その活動の一環として、去る１月と３月に、ネットワーク形成班の研究メンバーが、韓国の国立民俗博物館、フランスのパリ国立高等研究院およびリヨン第３大学、そしてドイツのハイデルベルグ大学を訪れ、本学の 21 世紀 COE プログラムが達成した非文字資料研究の実績を伝えるとともに、今後の研究ネットワーク形成のための研究情報の交換および研究者の相互派遣など人的交流の可能性について協議した。

なかでも、ドイツのハイデルベルグ大学では、極めてユニークな研究内容と大学院教育を展開する Karl Jasper 研究所を訪問し、これからの研究協力について意見を交換した。Karl Jasper 研究所は、ドイツ学術財団およびドイツ科学研究協会の研究支援を受け、学際的共同研究を行っているクラスターの研究拠点である。ドイツのクラスター（Cluster of Excellence）は、日本の COE（Center of Excellence）プログラムに類似する研究プログラムで、学際的に行われる研究への取り組み方や組織、そしてクラスター研究理念に基づいたクラスター独自の大学院教育は注目すべきものであった。

今回の訪問に際して協議の場を設定してくださったのは、東アジア研究センター・東アジア美術史研究所のメラニー・トレーデ教授であった。トレーデ教授の細心な配慮による日程設定のおかげで、短い訪問ではあったが、所長の Madeleine Herren-Oesch 教授、Martin Gieselmann 大学院教育担当マネージャー、Christiane Brosius クラスター教授、データベース構築担当の Matthias Arnold 氏ら、クラスターの重要メンバーと会い、クラスターの研究活動と大学院教育について詳細な話を伺うことができた。ここでは、その内容を、ハイデルベルグ大学クラスターの研究活動と大学院教育を中心に紹介することにしたい。

ハイデルベルグ大学のクラスターと Karl Jasper 研究所

ハイデルベルグ大学は、ドイツ政府が卓越した研究と教育を実践する大学を支援する「Initiative for Excellence」の助成をうけ、大学の研究環境や若手研究者の養成、国際的競争力の強化、そして大学の知名度を向上させる努力を続けてきた。さらに、その一環として進められる「総合大学への潜在力の具現化（Heidelberg: Realizing the Potential of a Comprehensive University）」（2012 年まで継続されるという）の研究支援を背景に、「古典的な大学」から「未来型の総合的な大学」へと変貌を目指しているという。ハイデルベルグ大学は、「Initiative for Excellence」の研究助成として二つの研究プログラムが採択されたが、その一つが、Karl Jasper 研究所が推進している「グローバルコンテクストから再構築するアジアとヨーロッパの文化交流（The Cluster on Asia and Europe in a Global Context: Shifting Asymmetries in Cultural Flows）」である。その研究が目指す目標は、アジアとヨーロッパの間に往来された文化の流れは、多くの場合にヨーロッパ史観の支配的立場から不均衡に捉えられてきたとし、ヨーロッパやアジアの歴史、言語、文化遺産など関連諸分野の多角的な研究のアプローチにより、従来のヨーロッパ中心の視点から定義されてきた文化交流の偏見を是正しようとするものである。その研究を推進するために、ハイデルベルグ大学のアジアとヨーロッパ関連研究所が Karl Jasper 研究所を拠点として集結し、異なる領域の専門家が同一の目標に向かって共同研究を行っている。

幅広い研究活動を円滑に進めるために、Karl Jasper 研究所の他にもインドと中国に設けた研究支部があるというが、それらの海外研究拠点とともに Karl Jasper

研究所はクラスター活動の中核部の役割を担う。クラスターの「グローバルコンテクストから再構築するアジアとヨーロッパの文化交流」は、四つの研究領域で構成されている。

1、統治と行政研究グループ
2、公共領域研究グループ
3、衛生と環境研究グループ
4、歴史と文化遺産研究グループ

四つの研究グループは、それぞれアジアとヨーロッパ研究を、古代史から近現代史研究にいたるまで、広域な視点から文化交流における歴史の再構築に取り組んでいる。

これらの研究領域を軸に、ポストドクターを中心とした若手研究者はいくつかのテーマによる研究グループを組織し、長期的な研究活動に取り組んでいる。五つに分かれている若手研究グループの具体的な研究テーマは次のようである。

1、不均衡的な文化情報の流入―19世紀以降のグローバル情報ネットワークにおけるヨーロッパと南アジア
2、災害文化―歴史と文化に関する比較研究から再構築する社会、文化、自然環境の間における不均衡
3、効率性に対する魅了―近世ヨーロッパとアジアにおける概念の流入と官僚制度の出現
4、越境する空間とアイデンティティー中国のハルビンを例にして（1898年～1949年）
5、国家形成の要素としての転移

若手研究グループの研究は、クラスターと緊密なつながりを持って展開されるもので、その研究成果は、クラスターの研究担当者による研究とともに、「文化交流のイメージに関するメガ・データベースの構築」の中に蓄積される。メガ・データベースはIT担当部のIT技術者、クラスター研究担当者を中心に、ポストドクター、大学院生の協力で資料の収集と整理が行われている。現在、文化交流概念データベース（Transcultural Concepts Database）と文化交流イメージデータベース（Transcultural Images Database）の二つの大型データベースを構築中であるという。

さらに、クラスターの研究を支えるメンバーとして4人のクラスター教員が採用され、研究の重要な一翼を担っている。なかには海外から迎えた研究者も複数含まれている。その専門領域は、「ヴィジュアルとメディアの文化人類学」、「文化経済の歴史」、「グローバル美術史」、そして「知の歴史」などであるが、クラスター教員は、メガ・データベース構築のための資料の収集など、共同研究の重要な役割を担うとともにクラスターに設置された博士課程の大学院生の指導にもあたるという。ハイデルベルグ大学クラスターのユニークな点は、クラスターの研究理念と方法論を継承し、発展させる将来の人材を育てるために、クラスターが独自に運営する大学院が設置されていることである。以下、大学院プログラムついて、若干、紹介しておく。

クラスターの大学院教育

ハイデルベルグ大学クラスターの研究活動の中に、最も斬新で革新的な試みは、クラスターの研究趣旨に基づいたクラスター独自の大学院教育を展開していることである。クラスターの大学院はKarl Jasper研究所に置かれており、指導はクラスターの研究担当者が担当する。大学院に設けられているのは、博士課程のみであるが、クラスターの研究活動とともにスタートしたプログラムであるだけに、課程の内容もクラスター研究の理論や方法論の教授に重点が置かれている。博士課程の学生は、クラスターの豊かな国際的研究環境のなかでクラスターの教員による指導を受ける。

具体的なカリキュラムとして、多様な文化交流学の理論や方法論に関する講義、ヨーロッパやアジアの多様な研究機関に支えられる研究環境の中で文字資料や非文字資料の収集への参加、そして博士論文プロジェクトへの積極的な支援などがあげられるが、これらの内容は、クラスターの研究内容と密接なつながりを持つものである。現在、クラスターの大学院には、初年度に受け入れた13名と2年次の19名を合わせて、計32名が在籍中であるという。クラスター大学院プログラムには、大学院担当マネージャーが大学院生の研究方向やコースワークの履修などについてきめ細かな指導をし、また大学院生の生活の面にも気を配る体制が整っている。大学院課程は、博士課程の履修と学位論文の提出まで3年間で修了することを目標としており、1年目は理論と方法論を中心とした授業、2年目は海外でのフィールドワークの実施、そして最終年度の3年目は学位論文の作成に充てる。コースワークや博士論文プロジェクトに対する指導教官の細かな指導と大学院生の自立的な研究体制を並立させたクラスターの大学院プログラムは、伝統的なヨーロッパの大学院教育を一新した斬新な試みとして注目されている。

大学院生の研究テーマとしては、インド研究、中国研究、日本研究、文化人類学、美術史、演劇史、国際衛生、通信と情報学、宗教学など、クラスターの研究コンテクストと直接関連のある分野から選ばれ、大学院生は個人の学位論文テーマに近いクラスターの四つの各研究グループにRA（Research Assistant）として属しながら、クラスターの研究にも加わる。クラスターの研究担当者で構成される二人の異分野専門の指導教官が大学院生の指導にあたり、クラスターのポストドクターがチューターとして大学院生にきめ細かな研究支援をする態勢も印象的であった。それぞれ専門領域の異なる二人の教員が指導教官を担当するのは、学際的研究を実践するクラスターの理念を大学院の教育の場で体験させることが目的であるという。サマーセミナーやワークショップなどを、Karl Jasper研究所の他にもアジアの各地で積極的に開催し、大学院生に幅広い国際的研究環境の経験を与えるのも、学際的共同研究を実践するクラスターの教育課程に相応しい特徴であるといえる。

クラスターの大学院プログラムが目標とするのは、クラスターの研究が単なる一つの研究プロジェクトとして完結し、一つの研究成果を作り出すだけで終わるのではなく、クラスター研究の新たな方法論が次の世代の研究者に継承され、さらに発展していくことである。クラスターの大学院生は全員奨学金が支給され、学費は勿論、生活費までが保証されており、2年目に行われる海外でのフィールドワークに対しても、1年間の調査・研究費を全面的に支援するという。このようなクラスターの大学院プログラムは、国内外の多くの人材をひきつけ、クラスターでの研究をめざして世界各地から優秀な学生が集まっている。大学院定員の半分は、アジアからの留学生に与え、アジアからの優秀な人材を積極的にかつ優先的に受け入れている。クラスターの大学院で使用される言語は、ドイツ語ではなく英語である。すべての講義や論文指導などが英語で行われているが、それは、外国人留学生に、上達するまで相当な時間を要するドイツ語力を要求するよりも、国際的に活躍できる若手研究者養成を優先した結果であるという。また、海外からの志願者がドイツ国内の学生と同じ条件で面接試験に臨めるように、時差が十分回復できる宿泊日数を設定し、その費用はクラスターが全面的に支援するという話を伺い、優秀な人材確保に取り組むクラスターの真剣な姿勢が伝わってきた。

非文字資料研究センターは、現在、ハイデルベルグ大学のKarl Jasper研究所と若手研究者の交流、研究情報の交換、そして共同研究について、協力関係を模索中である。

ハイデルベルグ大学の大学広場

クラスター関係者との協議

2008年度
非文字資料研究センター　**第３回公開研究会**

震災復興と文化変容

—関東大震災後の横浜・東京—

日　時：2009年３月14日（土）10：00～16：20
会　場：横浜ランドマークタワー　25階2501大会議室
基調講演者：西村幸夫（東京大学先端科学技術研究センター教授）
　　原　武史（明治学院大学国際学部教授）
報告者：　真野洋介（東京工業大学大学院社会理工学研究科准教授）
　　水沼淑子（関東学院大学人間環境学部教授）
　　田中　傑（芝浦工業大学工学部PD研究員／神奈川大学非文字資料研究センター客員研究員）
　　寺嵜弘康（神奈川県立歴史博物館専門学芸員）
　　北原糸子（非文字資料研究センター研究員）
資料紹介：　高野宏康（非文字資料研究センター研究協力者）
パネルディスカッション・コーディネーター：川西崇行（早稲田大学教育学部講師）
司　会：北原糸子

はじめに

21世紀COEプログラムの研究課題の一つとして、地震災害について調査・研究を進めてきたことを受け、非文字資料研究センター発足後は、特に関東大震災の復興過程の問題に取り組んでおり、その中間報告として、この度、公開研究会を企画した。

本公開研究会では、震災後の復興過程で人や社会がどのように変化したかを総合的に捉えることを課題に、都市としての性格が異なる東京と横浜の復興を比較し、都市計画、建築史、歴史学の専門家がそれぞれの視点から震災復興と文化変容について検討を行った。以下、報告内容はレジュメと録音記録に基づき、筆者が要約したものである。

「震災復興の都市計画とその現代的意義」

基調講演①　　西村　幸夫

震災復興の都市計画では、基本的なインフラ整備に力を入れた。区画整理を実施し、道路、橋梁、上下水道、運河などを驚くべきスピードで建設していったが、これだけの規模の区画整理は世界的にも初めてであった。しかも、区画整理を進めながら同時に、学校や公園などの建物に最初の段階で予算をつけている。このようなことが出来たのは、後藤新平が震災前の東京市長時代から都市改造の理念をもって準備を進めていたためである。後藤が「復旧」ではなく、「復興」を主張していたことは重要である。後藤は東京市政調査会を作り、アメリカから専門家のビアード博士を招聘したが、人材は以前から育てていた。

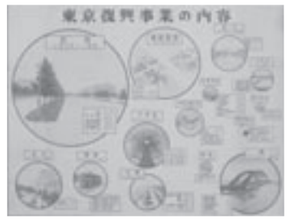


図１　東京復興事業の内容（復興記念館展示）

19世紀のヨーロッパでは皇帝や王が象徴的な目抜き通りを作るなどバロック的な都市を建設したが、東京はそうなっていない。おそらく区画整理という手法のためである。区画整理に際して、東京の交通上の最大の課題は南北交通であった。靖国通りを東西の軸、昭和通りを南北の軸にするという縦横の軸は最後までぶれず、それに平行していくつか道を作っていった。この時、東京の中心部に作られた道路は現在も都市の骨格をなしている。言い換えれば、この時代に作ったものを食いつぶしながらその後生き延びてきたといえる。例えば、昭和通りの緑地帯が立体交差になっていることからもそのことがわかる。戦災後にも同様の復興計画がなされるべきだったが、震災復興の際のようなビジョンはなかった。そういう意味でも震災復興は画期的だったといえる。

「震災と天皇・皇室」

基調講演②　　原　武史

昨年暮れから今年の始めにかけて、日比谷公園で「年越し派遣村」が開かれたのはまだ記憶に新しい。だが、同様の光景が、今から86年前の関東大震災時に、すぐ隣の皇居前広場（当時は宮城前広場）で大々的に見られたことは完全に忘れ去られている。

震災当日、宮城の「主」である大正天皇は不在で、皇太子は９月２日、宮城前広場を罹災民に開放したが、実態は罹災民が広場に溢れたため事後的に承認したという方が正しかった。当時、宮城前広場は勿論、宮城も恐れ多い場所と見なす意識は感じられない。その後、「虎ノ門事件」等により自主的に人々が去り、裕仁皇太子の結婚では儀式の場となり、「聖なる空間」が確立する。一方、上野公園では罹災民がバラック生活を続け、1924年に恩賜公園となるが、背景には震災前とは異なる「聖」と「俗」の峻別があったと思われる。つまり、宮城前広場から罹災民を排除し、広場を天皇制最大の政治空間へと変容させる代わりに、上野公園では罹災民を排除せず、自由にしたのである。震災に伴う都市空間の変化に裕仁自身がどの程度関与していたかは不明だが、都市計画に関心があったことは確かである。1930年には宮城前広場で帝都復興完成式典が開催されるなど、宮城前の儀式には政治的メッセージが込められた。太平洋戦争末期には、震災時のように宮城前広場に避難する市民はおらず、戦争終結まで「聖なる空間」を保ち続けた。占領期にはメーデー等の集会に使われたが、1952年の独立回復後、皇居前広場は元の「聖なる空間」に戻っていった。

図２　宮城前広場の群衆（東京都慰霊堂所蔵）

「年越し派遣村」を皇居前で開くという発想は微塵もなかったに違いない。かつて藤森照信は、この広場には「打ち消しのマイナスガスが立ち込めている」と喝破したが、歴史を辿ると、この「マイナスガス」の源は関東大震災にあったのである。

「関東大震災後の避難行動と市街地形成」

報告①　　真野　洋介

関東大震災は、横浜で以前から問題になっていた既成市街地の住環境悪化に加え、多くの避難民の発生とその避難所の確保という新たな問題を引き起こした。また、復興事業の計画・実施に際して、小学校跡地や公園等に建設された応急仮設住宅（公的バラック）等を撤収し、避難民の代替住宅を確保しない限り、事業が進まないという状況をもたらした。さらに、震災後の東京市内外の被害者の移動は、郊外の市街地化を促進する引き金となった。本報告では、震災直後の避難所や仮設住宅等応急的な環境整備のプロセスと、避難民の移動によってもたらされた市街地構造の変化の２つの観点から、復興の前提となる諸条件を整理し、東京・横浜の地域性の比較検討を行う。

図３　横浜市仮住宅（横浜市役所『横浜市要覧』1927年６月）

震災後の、横浜市の被災は９割以上が家屋に被害を受け、６割が全焼、２割が全半壊という状況であった。被害世帯の割合は、東京市内で被害が大きかった下町、隅田川両岸エリアと同程度であったが、焼失割合が若干低く、全半壊の割合がやや高いという特徴を持つ。横浜では「公設避難者収容所」と呼ばれた公設バラックは、大規模寺社地や学校跡地などに建設された東京市に比べ、横浜では小規模分散型という特徴を持つ。鉄道の復旧状況や都心との隣接状況により、避難者数の増減に時間的なずれが見られ、その後の市街地形成に影響を与えた。震災義捐金を基に、内務省臨時震災救護事務局では、震災一ヶ月後に、罹災者用に小住宅5000戸の建設計画を発表した。その内訳は東京市2000戸、東京府下

1500 戸、横浜市 1000 戸、神奈川県下 500 戸であった。

「横浜市営住宅事業にみる震災復興」

報 告 ② 水沼　淑子

これまで震災前の横浜市の市営住宅事業の研究を行ってきたが、ここでは震災前後の変化について自分なりに考えてみたい。横浜市の研究では、開港・関東大震災・戦災の３つの大きな画期があると言われる。横浜市は開港後に発展した都市という点で、東京とは性格が異なる。以下では横浜市の性格を考慮して市営住宅事業を検討する。

横浜市では、1919 年の大火災の再建のため、国の住宅政策が未確立であった時期に、市独自の政策として市営住宅事業に取り組み始めた。その後、共同住宅事業を他都市に先駆けて着手し、幅広く展開していった。横浜市は、震災前までに公営の普通・共同住宅を 800 戸近く自前で持っており、戸数が多いという特徴がある。これらの共同住宅は、関東大震災で被害を受け 660 戸ほどに減少した。

図４　三ツ沢住宅（創建時）（横浜市社会課『御大典記念写真帖』1928 年）

震災後も、横浜市の共同住宅事業は継続し、さらに多様な事業を展開していった。まず、震災前後で住宅の規模が変化し、中産階級の少し下あたりをターゲットにしていった。また、公設浴場や店舗を併設した住宅地計画を展開した。それ以外にも、「外人住宅」「小住宅」など市営住宅事業のバリエーションを展開していった。特に、「外人住宅」事業は外国人によって発展してきた横浜の特徴を示している。その後、次第に分譲住宅や供給住宅という、市が所有しない方式に変化していった。結論として、横浜市は震災の前後で、居留地から共同住宅都市に変容する契機となり、横浜が住宅によって立つ都市として再スタートする画期となったといえよう。

「関東大震災のバラック —再建のプロセスと法規との関係—」

報 告 ③ 田中　傑

今日のわれわれの語感では、バラックとは簡易かつ安易な建築物を意味する。関東大震災後のバラックは、『東京府及神奈川県ノ市街地建築物法適用区域内ニ於ケル仮設建築物ニ関スル件』（1923 年勅令第 414 号）が、罹災地に期間限定の建築物を建てる際に市街地建築物法（1919 年法律第 37 号）の大部分の条文の適用を猶予したことで成立した。要するに、簡易に建築できるバラックは罹災者側にも行政側にも好都合だったのである。にもかかわらず、当時のバラックは「ピンからキリまで」多様であった。本報告ではその理由を再建プロセスや法規との関係から説明していきたい。

図５　宮城前広場の罹災者

（私設）バラックは、罹災者が自らの所有地に建設したものや、罹災借家人、不法占拠者によるものまで多様であるが、罹災者たちはこれらを徐々に改良していった。このような再建プロセスの相違が多様なバラックが存在した理由の一つである。もう一つの理由は、建築・都市計画関連法規との関係にある。バラックは区画整理時の撤去を容易にし、補償額を制限するために、様々な制限を受けていた。そのため、区画整理地区内では換地処分告示までバラックの建設着手が認められていたため、非合法建築物を再び新築することができたのである。

以上、２点の理由により、期間限定という当初の前提は次第に形骸化し、その前提ゆえに許された非合法行為が目的化し、常態化していった。われわれは当時の「バラック」という言葉を解釈する際に、こうした多面性を意識しておく必要がある。

「横浜の震災復興博覧会」

報 告 ④ 寺嵜　弘康

復興記念横浜大博覧会（以下「復興博覧会」）は 1935 年３月 26 日～５月 24 日まで 60 日間、横浜市中区の山下公園及びその周辺を会場に開催し、総入場者は約 323 万人を数え、決算でも８万円余の黒字の大事業であった。本報告では、復興博覧会を対象に、横浜の震災復興を文化の視点から検討してみたい。

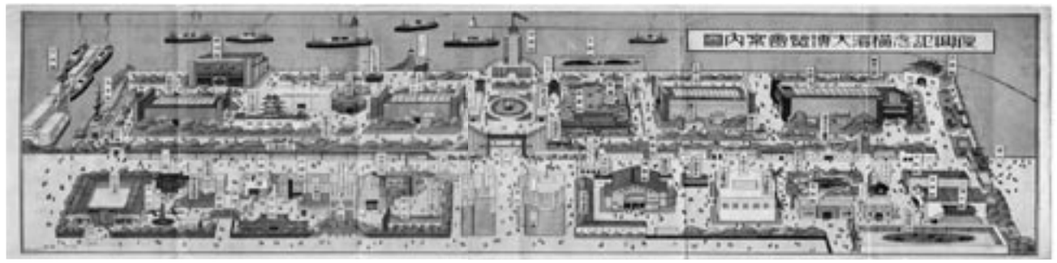


図６　復興記念横浜大博覧会案内図（個人蔵）

復興博覧会は貿易振興と産業の発達を目的とする点では同時期に他府県で開催された産業博覧会と大差ないが、入場者数で他を圧倒している。その理由の一つは展示館の多様さにある。復興館ではパノラマ方式の展示が採用され、震災記念品が陳列された。その他、物産陳列館や、横浜の歴史を紹介した開港歴史館、海陸軍の国防館などがあり、演芸館では舞踏やダンスなど日替わりのイベント・アトラクションが開催され、観客を楽しませた。

また、復興博覧会では大衆の感覚に訴える宣伝物として、新聞広告、絵葉書などが作成され、ポスターや標語、テーマソング等を懸賞公募し、飛行機から宣伝ビラを大量散布するなど、様々なメディアを用いた宣伝文化の博覧会でもあった。

復興博覧会の剰余金８万円で、横浜市は「開港歴史館」を震災記念館の隣に建設する構想を提示したが、市長交代で「夢の歴史館より現実の貿易振興」として構想は実現しなかった。しかし、1942 年には時局の要請から、震災記念館が市民博物館へと改組する際には、開港歴史館構想の一部が反映された。戦後横浜市が開港資料館を建設したのは 1981 年、関東大震災以降の横浜を扱う横浜都市発展記念館の開館は 2003 年のことである。

「震災前後 —町内会の変貌—」

報 告 ⑤ 北原　糸子

ここでは、震災前後の町内会について、調査資料の内、三井文庫所蔵「大正震災今井町邸内バラック避難者感謝状」等を分析し、新たな観点の提示を試みる。背景には、従来の、大正の自由闊達な雰囲気が、震災を契機に画一的ナショナリズムにまとめ上げられ、昭和の戦争の時代に突き進んだという理解に対し、そこに至る歴史の試行錯誤、人々と時代とのせめぎ合いを復興過程の中で検討する仕事が不十分であるという問題意識がある。

図７　三井今井町邸内バラック（三井文庫、北 1544）

震災直後、三井各社が内務省に寄贈したバラックは、公設バラックとして東京市が管理したが、この今井町三井家バラックは三井家直営である点で他と異なる性格をもつ。東京市役所の調査記録から、今井町町会が三井家バラック開設後に発足したこと、会員は震災後二年間で１割強増加したこと等がわかるが、特に興味深いのは、三井家がバラック撤収時の残留入居者の移転を町会に委託し、運営費を町会会費に組み入れたことである。これは恐らく、町内会がバラック管理に果たした役割が三井家に評価された結果を意味する。

震災後、町内会は増加の一途を辿り、1940 年代には戦争遂行の末端組織となったことは周知の通りである。戦後、GHQ により廃止されるが、講和条約後には公然と復活するなど意外な程根強い。町内会は江戸期以来の人の自然のまとまりとして、また防災組織として評価すべきという主張もある。地域コミュニティの必要性が求められている現在、震災後の町内会の動きから何を学ぶか、私たち自身の考え方が問われている。

「東京都慰霊堂保管・関東大震災関係資料リストについて」

資 料 紹 介　　高野　宏康

休憩時間を利用して、東京都慰霊堂の収蔵庫保管資料の調査成果について説明を行った。東京都慰霊堂には、復興記念館に展示されていない多数の震災関係資料が保管されているが、整理・調査が不十分であり、個別の資料目録は作成されていなかった。今回の調査では、大型の物質資料や展示パネルなどを除く、出版物、簿冊などの内部資料、絵画・ポスター等の整理・分類を行いリスト化した。これらは一般公募で蒐集された震災記念物が中心で、特定の蒐集者の意図でなく、自然に集まった資料として、震災記念堂と復興記念館の成立過程やその意義を検討する上で貴重な資料群であると言える。今後の調査・研究の進展が期待される。

図８　関東大震災関連雑誌類（筆者撮影）

パネルディスカッション

まず、コーディネーターの川西崇行が、本公開研究会の共通の論点である復興計画についてポイントを整理した。後藤新平は単なる応急対応ではなく、建築物の不燃化から、社会福祉、住宅問題などを含め、社会改良の一環として都市の近代化を構想していた。その後、東京と横浜の違い、文化の連続面と断絶面などについてパネラーに意見を求めた。前者について、寺嵜は東京と横浜の被害範囲の違い、避難民の移動時間の差を指摘し、水沼は横浜では居留地の外国人の存在が復興計画に影響を与えたことを指摘した。また、横浜の震災記念館が戦前に消滅した理由について、寺嵜は戦時下の金属供出で震災遺物が供出されたこと、被害の悲惨さより今後の発展を強調する方針などで市民博物館に統合されたと説明した。後者については、北原が文化財の焼失により指定文化財が大きく変化したことと、町内会の問題は単純に江戸期以来の連続性を強調することはできないことを指摘した。真野は路地のあり方に着目して、江戸期以来継続しているのか、区画整理に含まれていたものか不明であることを指摘した。西村は区画整理がすべて良かったという訳ではなく、現在では活気が失われた所も多いことを強調した。田中は自らの聞き取り調査の経験から、震災の知恵を今後に伝えていくことの重要性について述べた。最後にまとめとして、震災復興から学ぶ知恵と継承していかなければならないことをそれぞれの立場から述べて討議は終了した。

コメント

本公開研究会の企画に関わった立場から、本公開研究会の成果と課題について述べておきたい。成果としては、まず、都市計画、建築史、歴史学の学際的な討議により、震災復興について総合的に分析する方向性を示すことができたことである。歴史学の分野では、震災復興についての研究は始まったばかりの状態である。基本的な部分から、都市計画や建築史の豊富な研究蓄積から学ぶことが多かった。また、従来、個別に被害や復興が説明されがちであった横浜と東京を比較検討したことで、都市としての性格の違いが復興に際してそれぞれに大きな違いをもたらしたことが明らかになった。

課題として残された点は、バラックや市営住宅などの建築物や、都市計画に関する景観変容の話題が中心となり、テーマとして掲げた文化変容については、部分的に言及するに留まったことである。震災復興と文化変容の問題については、絵画やポスター、美術運動といった非文字資料に直接関連するテーマだけでも膨大な論点があることは言うまでもない。この点については本年度以降、さまざまな形で研究を展開していく予定である。異分野の研究者が多数集まったことで刺激的な議論が展開された一方、各分野で資料の扱い方や解釈の違いから、問題意識、用語・概念など、各分野で大きな相いがあることが改めて浮き彫りになった。学際研究では、共通点・相違点を明確にして、それぞれの分野の長所を吸収していけるような工夫が必要だと痛感させられた。長時間にわたって多数の報告者から様々な論点が出されたことは、参加者にとって大きな刺激となったのではないかと思われる。幸いなことに本公開研究会は立ち見が出る程の大盛況であった。参加者の皆様には感謝申し上げたい。

何を残せば大震災は歴史的に捉えられるのか？

～「震災復興と文化変容ー関東大震災後の横浜・東京ー」参加記～

板垣貴志（阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 震災資料専門員）

私は、阪神・淡路大震災のメモリアル施設である人と防災未来センターで震災資料専門員として勤務している。現在、人と防災未来センターには、市民から寄贈いただいた一次資料（アーカイブ【archive】）が約 16 万９千点、災害・防災に関する二次資料（ライブラリー【library】）が約３万２千点収蔵されており、日々、それら資料の保存管理や利活用に腐心している[1]。ご存じの通り、阪神・淡路大震災は 1995 年の出来事であり、1923 年に起こった関東大震災の 72 年後にあたる。後者は、歴史的な分析をするに十分な年月を経ているが、前者の歴史分析はまだ緒についてもいない状況で、未知数な可能性を秘めた多様な現代資料が収集されているのである。私は、出張で参加していたこともあり、震災・復興に関するどのような資料が後々歴史的に重要になっていくのか、関東大震災に関する最新の歴史研究を参照にしたいという問題関心を抱いていた。この小論も、そのような限られた視野から書いたものであることをあらかじめ断っておきたい。

「災害からの復興過程に関する歴史分析は、歴史学の人だけではできない。学際的なアプローチが必要」との主催者側の趣旨説明にもあったように、他分野にわたる研究報告が続いた。僭越ながら、それら多様な報告を災害文化の基本と言われる《自助・共助・公助》の枠組みで少々強引にまとめると、《自助》に関する報告がバラック再建過程を明らかにした田中傑氏、《共助》に関する報告が町内会に着目した北原糸子氏、そのほかの方々の報告は、《公助》に関するものであったように思われる。今回の公開研究会が、《公助》に関する報告に偏っていた印象は拭えないのではないだろうか。私はなにも、《公助》に関する研究は意味がないと言うつもりは毛頭ない。人々にとっての関東大震災体験をより深部で捉えるためには、時代は異なるにしろ、同じように社会に大きなインパクトを与えた阪神・淡路大震災経験を参照にする必要もあるのではないかと考えるからである。

その一例として、阪神・淡路大震災は日本社会のあらゆる分野に教訓を残したが、とりわけ命に関わる大きな問題として、地域のコミュニティー力の重要性を人々に再認識させたことが挙げられる。大震災発生直後、倒壊した家屋の下敷きとなり生き埋め状態になったが救出された人数は約３万５千人であった。そのうち、実に８割に当たる約２万７千人が近隣住民により救出され、警察・消防・自衛隊により救出されたのは約８千人と概算されている[2]。これは未曾有の危機に際して、公的機関が果たす役割（＝公助）には限界があり、地域のコミュニティーが果たす役割（＝共助）の大きかったことを象徴している。むろん、自分の身は自分で守る（＝自助）ことが重要であったことは言うまでもない。同じような現象は、関東大震災でも起こったことが想定される。震災後に町内会が急増したことを明らかにした北原報告に惹かれた理由はこれである。「文化変容」を表題に掲げた公開研究会であったが、都市の形や建物の形の変容に終始していたように思う。もちろんそれも重要な点であるが、当該期の都市民衆意識や生活様式変化にまで分析が到達しているとは言えない気がした。

その要因を考えてみるに、関東大震災を歴史分析するに際しての資料的限界を図らずも露呈しているのではないか、と思うのである。つまり、関東大震災に関する比較的手軽にアクセスできる資料は、公的な記録に限られているのではないだろうか。関東大震災の震度分布図を作成した武村雅之氏は、「関東震災に関してはいろいろな人がいろいろなことを語ります。しかし資料的なオリジンを聞いてもよくわからないことが多い」と指摘している[3]。大震災を経験した時代と社会の深部を歴史的に捉えるためには、記録に残りにくい部分こそ重要で、さらなる資料発掘を期待しているし、その必要性はあると思う。

翻って阪神・淡路大震災に関しては、何を残しておくべきなのか。私自身、いまだ確証が持てないでいる。今後は、関東大震災と阪神・淡路大震災に関する歴史研究の相互交流が不可欠であるし、その意義は大きい。今回のような意義深い公開研究会が、今後も頻繁に開催されることを強く望んでいる。

1 阪神・淡路大震災における震災と復興に関する資料収集については、全史料協による特集「阪神淡路大震災と記録つくり」（『記録と史料』第 8号、1997）および、佐々木和子「阪神・淡路大震災を未来につなぐ」（『地方史研究』299、2002）、同「アーカイブズが生まれる－災害とひとが出会うとき－」（『アーカイブズ学研究』第 4号、2006）を参照されたい。
2 河田惠昭「大規模地震災害による人的被害の予測」『自然災害科学』16-1、1997
3 北原糸子・寺田匡宏編『歴史・災害・人間－〈災害史・原論〉編－』P48　2003

2008年度
非文字資料研究センター　**第４回公開研究会**

租界研究の新しい可能性を探る

—上海シンポジウム—

日　時：2009年３月28日（土）10：00～17：00
会　場：上海文廟会議室　中国上海市文廟路215号
報告者：孫安石（神奈川大学）
　　金光載（韓国・国史編纂委員会）
　　貴志俊彦（神奈川大学）
　　羅蘇文（中国・上海社会科学院歴史研究所）
　　冨井正憲（韓国・漢陽大学）
　　韓東洙（韓国・漢陽大学）
　　李百浩（中国・武漢理工大学）
コメンテーター：陳祖恩（中国・東華大学）
　　徐蘇斌（中国・天津大学）
司　会：大里浩秋（神奈川大学）・陳祖恩（東華大学）

はじめに
—本シンポジウム開催の趣旨及び経過—

2001年に、戦前の中国の諸都市に置かれた日本租界の歴史を明らかにし併せてその現況を調査することを目ざして同僚数人で共同研究を始めて以来、２度神奈川大学共同研究奨励助成を得、21世紀COEプログラムの一課題としても参加して、関連資料を多量に収集し、租界の現況についても複数回調査し、さらに中国の租界研究者との交流を深めることができた。そしてその間に、数回のワークショップを開くとともに、中国の研究者の協力を得て『中国における日本租界—重慶・漢口・杭州・上海』と題する本を公刊したことで、私たちが目ざした研究の一歩を踏み出すことができたが、それだけでは全く足りないことはいうまでもない。そこで、08年に神奈川大学に非文字資料研究センターが発足して以降取り組みつつあることの一つとして、日中韓３国の研究者が一堂に会してかつて中国、韓国に置かれた日本租界を含む各国租界の歴史や建物の現況、その他租界についてのもろもろの関心を議論して、それをきっかけに可能なところでの共同研究を実施していくということがある。

左：大里浩秋氏　右：陳祖恩氏

今回その出発となるシンポジウム（非文字資料研究センター「第４回公開研究会」）を上海で開いたのだが、その実現にはそれまでにも現地調査に協力しワークショップにも参加して下さった陳祖恩教授の力に負うところが大きい。陳教授は所属の東華大学人文学院を主催団体の一つにすることに同意するとともに、会場の設営に尽力し、さらにセッション１のコメントを担当して下さった。今回の報告とコメントをして下さったのは従来から交流のあった中国の研究者と私たち非文字資料研究センターの研究員だが、新たに韓国からお二人の参加を得たのは幸いだった。３月28日、上海の旧城内に位置する文廟（孔子廟）の会議室では、華東師範大学、上海師範大学、復旦大学の研究者や院生、上海在住の日本人多数の参加のもと熱のこもった報告と討論が行われた。以下は、各報告とまとめの要旨である。

セッション１
—租界に向けられた多様な眼差し—

孫安石（神奈川大学）「The North China Herald and Supreme Court and Consular Gazette（以下、The North China Heraldと略称）と日中関係史」は、上海で発行された英字新聞がどのような観点から1927年と28年の国民革命と日本の山東出兵、済南出兵を報じていたのかを紹介したものである。上海租界の利益を代弁する工部局の言論メディアでもあったThe North China Heraldは、中国国内の混乱を引き起こすことを理由に、1927年前後の国民革命を厳しく批判した。同紙は、日本の山東出兵、済南出兵について、日本が「攻撃されたAttacked」からであり、「攻撃したAttacker」のではない、という観点から、中国側を厳しく批判した。しかし、同紙の中国に対する報道内容は、1932年の第一次上海事変と満洲事変を境に大きく変化した。日本と中国の軍事衝突は、いままで欧米が中心になって経営してきた租界の利益を直接侵害するもので、今までのように事態を傍観する姿勢は許されなかったのである。

孫安石氏

図１　1928年４月14日、The North China Herald、部分
漢口のイギリス租界が中国側に回収され、次はフランス租界が回収されようとすることを風刺する挿絵。

金光載（韓国・国史編纂委員会）「上海の租界と韓国人（1910－1945）」は、日本の植民地支配を逃れて上海に在留した韓国人の研究には、「抗日」または、「売国奴」という従来の二分法的な分類ではなく、新たな分析枠が必要であることを指摘するものであった。1919年の三・一運動以降、上海には韓国臨時政府が組織され、上海の租界は韓国人にとって抗日運動の「策源地」になったが、1937年日中戦争が勃発して以降、依然として多くの韓国人が上海の日本人街の虹口に居住していたことも厳然たる事実である。近年、上海史研究のなかで、「グレー・ゾーン（灰色）」、または「コラボレーション（協力）」という理論が活発に提起されているが、上海の韓国人研究においても、その分析枠を一部、援用できるのではないか、という考えを提起した。

金光載氏

貴志俊彦（神奈川大学）「『中国における“外国人”人口統計データベース』を利用した地域人口分析－中華民国および満洲国を事例として」は、2009年３月に公開したデータベースをもとに【図２】、在華外国人の地域分布の特徴を明らかにするものであった。報告では、まず戦前中国における在外公館設置の推移を明らかにし【図３】、次に在華公館の人口統計表では1921年くらいまで「日本人」と「朝鮮人」、「台湾人」とを区分して用いていたこと、1923年第16回統計表からは、これを「内地人」「朝鮮人」「台湾人」に区分し（この３者を包括する概念として「本邦人」という用語を使用）、カテゴリー上は「日本人」という呼称が消滅したことを指摘した。さらに、こ

貴志俊彦氏

図２　「中国における“外国人”人口統計データベース－戦前編－」のトップページ
（http://area.net.cias.kyoto－u.ac.jp/statistics）

図3　戦前中国における日本在外公館分布図（1945 年時点）
［注］黒い丸が公使館、赤い丸が総領事館、黄色い丸が領事館。分館や出張所は、煩雑なため省略。戦前、もっとも多い時期には、公使館 1、総領事館 26、領事館 23、領事館分館が 25、出張所 6、合計 81（現在の約 11 倍）あった。

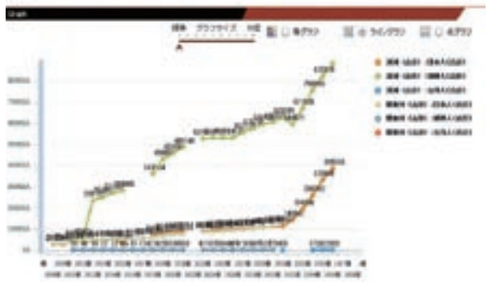


図4　満洲の日本人、朝鮮人、台湾人の人口数の逐年変化（1908 － 1937）
［注］オレンジ線の日本人と緑線が示す朝鮮人の人口増加率は、ほぼ同様に高かった。満洲における朝鮮人人口が急増したのは、1910 年の日韓併合、1932 年の満洲国建国後であったことが確認できる。一方、青色線が示す関東州の朝鮮人、水色線が示す満洲の台湾人の人口は、ほとんど伸びていなかった。

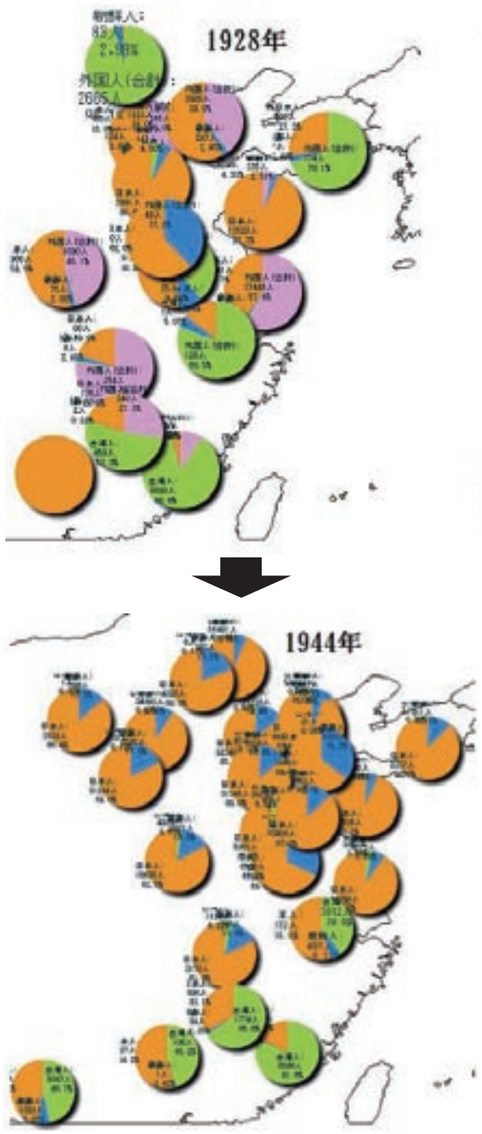


図5　中華民国における日本人･外国人の分布図（1928 年と 1944 年）
［注］1928 年中華民国国民政府が成立したとき、紫色や緑色で表示された外国人は、管轄区域ごとに違いはあるものの、各地に点在していたが、終戦前年の 1944 年にはオレンジ色の日本人が外国人のなかで突出した存在になっていたことがうかがえる。さらに、華北華中では青色の朝鮮人が日本人と同様に増加していたが、華南では緑色の台湾人の躍進が顕著であったことも見られる。

のデータベースを用いて、1908 ～ 37 年の満洲における日本人、朝鮮人、台湾人、外国人の逐年変化【図 4】、および中華民国における日本人と外国人の経年変化を示した【図 5】。

セッション 2
―旧租界の保存と再生―

羅蘇文（中国・上海社会科学院歴史研究所）「時代のシンボル、文明の記憶」は、清末の上海と天津に輸入された欧米の建築を紹介するものであった。清末の上海と天津は最も先進的な都市で、中国と欧米の建築様式が融合した優れた建物が多く建てられた。イギリスの建築士や設計士が優勢な地位を占めていたのは間違いないが、フランス租界、ドイツ租界などでは当然のことながらその他の多様な建築様式が輸入されていた。また、中国で最も早い時期に鉄筋構造（中国菜場－ 1898 年）や鉄筋コンクリート構造（恵羅公司－1906 年）の建築技術が導入されたのも上海の租界を経由したものであった。そして、上海と天津の欧米建築を代表する外灘と中街は中国を代表する金融街であるが、公共のレジャー空間としての役割をも担っていたことについても触れた。

羅蘇文氏

韓東洙（韓国・漢陽大学）「仁川における日本および清国の租界」は、仁川租界地における租界制度、日本及び清国の居住区形成過程、当時の在留中国人の職業とその戸数、主要中国人商店の種類と数及び商号名についての発表を行うとともに、近年現存実測調査を行った旧中国料理店と旧日本租界地事務棟についての報告、それに報告者自身が関わった銀行倉庫群を保存再生して運営を始めた仁川租界地展示資料施設の紹介を行った。

韓東洙氏

とくにこの発表のなかで取り上げられた仁川の清国居留地の報告は中国側の参加研究者に、それまで認識されていなかった朝鮮における清国租界の存在を知らしめることになり、大きな衝撃を与えた。それまで中国は租界研究を専ら受け身側としてのみとらえていたのであるが、朝鮮に対しては諸外国同様に中国が出かけて行った側でもあったのである。この発見は中国側の租界研究に必然的に大きなパラダイムを引き起こすことになり、今後の研究の展開が楽しみである。

図6　仁川清国居留地実測平面図（国家記録院所蔵、地籍原図、1913 年）

図7　仁川炸醤博物館計画案（仁川中区庁都市開発計画図）

冨井正憲（韓国・漢陽大学）「中国と韓国の旧鐘紡社宅地に関する調査報告」は、戦前に上海、青島、ソウル、光州に建設された鐘紡工場村を取り上げ、当時の図面や絵葉書、地図等の非文字資料を用いながら配置計画、福利施設、社宅についての分析を行い、当時の租界及び植民地の工場で働いていた人々の生活空間がいかなるものであったのか、また鐘紡の経営者が掲げた家族主義や、

冨井正憲氏

利益を国と現地と事業が三分の一ずつ分け合う三分の一主義の理念が当時の労働者の居住環境にどのように反映したのか。さらにその居住環境が戦後どのように変遷してきているのかを報告した。

その内容はこれまでの都市建築の計画建設を対象とした「もの」の研究と異なり、当時の租界地の工場で働く内外の人間の居住環境について論じた「生活・文化」についての報告であったために、会場参加者からは当時の経営者のユートピア思想、建築家の役割、労使の関係、労働運動等様々な角度から「鐘紡の工場村」に対する質疑が活発に出され、研究の意義やスタンスについて議論が及んだ。

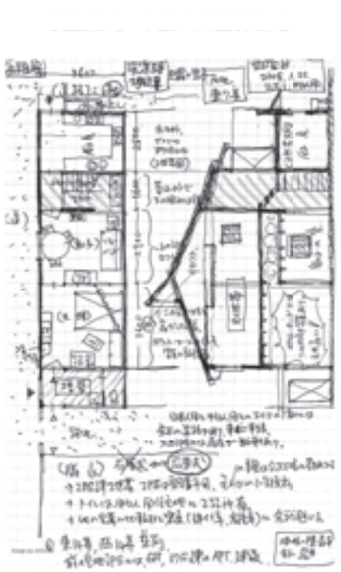


図８　上海での調査　中国人用里弄住宅

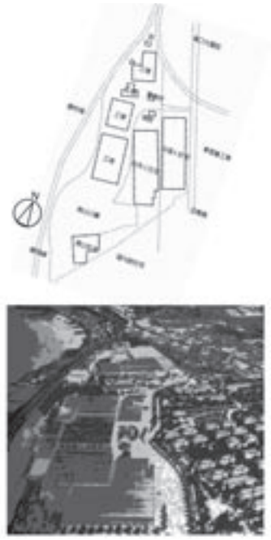


図９　青島　鐘紡・公大第五廠工場社宅配置図

李百浩氏

李百浩（中国・武漢理工大学）「武漢における日本租界地の保存と再生」は、武漢における長年の租界地研究で得られた成果を、今後の都市計画や開発にいかに反映し、生かしているかを自身の関わった２つの事例を取り上げて紹介説明した。１つは当時の中国共産党の活動拠点となった２階建の連立社宅である。これは報告者の修復設計によって内外とも当時の姿に復元され、現在は展示を中心とした記念館として保存され、租界地の当時の町並みと都市住宅の面影がそのまま再現されている。またもう１つは報告者が諮問委員として関わった旧漢口神社跡地近くの駅前開発計画である。報告者のアドバイスにより新規開発計画のなかに現存する当時の住宅やその一部分を取り入れ保存再生した事例である。

２つとも旧日本租界地の中に現存する住宅を対象とした保存と再生の事例であり、スクラップアンドビルドの街づくりから歴史と記憶を継承する街づくりへと、開発の手法を変換した実例であって、それを示すことで今後の中国の租界研究の方向と意義についての問題提起を行った。

図 10　保存工事中の漢口日本租界地内旧社宅住宅

図 11　駅前新開発で保存再生された旧租界住宅

シンポジウムの成果と課題

最後に、貴志が、徐蘇斌氏（天津大学）の「租界・租界建築の研究」と題するコメントを踏まえて、本シンポジウムの成果と課題について、以下のようにまとめた。

1. 歴史学と建築学による文理融合型共同研究の推進：本シンポジウムでは、歴史学者によるマルチ・アーカイブ調査と、建築学者によるフィールドワーク調査をミックスさせた複合的アプローチの優位性が確認された。
2. 日中韓における東アジア比較研究という視点の提示：東アジアにおける租界・租借地・居留地の比較研究を通じて、それぞれの歴史的、法制的特徴を明らかにし、域内の複合空間の特異性を検出することが課題となっていることが明らかにされた。
3. 歴史研究から見出だす現代研究の意義の確認：旧租界の実態分析をもとに、旧租界地およびその建築を歴史的文化遺産と受け止め、それらの保護を図り、さらに現代的な都市再開発に資することの重要性が確認された。
4. 史資料と方法論の共有化についての認識：本シンポジウム開催を通じて、神奈川大学非文字資料研究センターを拠点とした東アジア研究ネットワークを構築し、資料のみならず、方法論の共有化をはかることが同意された。今後、さらに継続的な討論会の開催、デジタル・データベースの共同構築について承認が得られた。

徐蘇斌氏

コラム Column

《都名所图会》所引汉诗文之管窥

沈 少 康（中国 浙江工商大学）

一 前言

《都名所图会》，是日本名所图会系列书中最早出版的一部。与通常略显枯涩乏味的说明文书——地志不同，它在编纂中注入了新鲜的血液，比如说有大量诗歌的引用。所引之诗歌又广含和歌，俳句，汉诗等等。汉诗文在日本文学地位上一直被视为高雅之作，故汉诗的引用在文学价值上为名所图会增色不少，亦使其更耐人品味，因而值得研究和考察。

二 所引汉诗文的分类

将《都名所图会》中出现的汉诗文统计分类如下：

汉诗 10 首、对联 11 首。

其中，按出现在书中的位置分类：插图，汉诗 5 首；解说文：汉诗 5 首，对联 11 首。

按照引用方法分类：直接引用：汉诗 7 首，对联 11 首；间接引用：汉诗 3 首

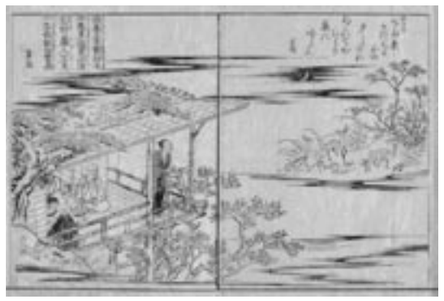
描绘的主题分类：社寺：汉诗 6 首、对联 11 首 其余：4 首

三 汉诗文的作者

诗文作者，提及姓氏名号的，日本诗人共九位：一休、宽雅公、罗山子、高泉、千呆、即非、和克明、藤季纲。中国诗人五位：贾岛、李白、杜牧、隐元、范仲淹。

著者所处时代来看：江户之前的有：李白、贾岛、杜牧、一休、和克明、范仲淹；江户时代的有：罗山子、木庵、高泉、千呆、隐元、即非

除以上诗人之外，还有一类诗人的存在，他们的作品没有出现在名所图会之中，但他们的名号却被提及或者引用，多数为中国的文人如：韦应物、王维、陆羽、苏轼等等。这也足以说明汉文学在日本文学中的地位。



四《都名所图会》中所引汉诗之鉴赏——以贾岛之诗为例

如上图所示图中诗文没有诗题，原诗题为贾岛做创《盐池院观鹿》：“条峰五老势相连，此鹿从来若个边。别有野麋人不见，一生长饮白云泉。”

图中的诗文和景象可谓珠联璧合，但若从内容上看来，却与原诗有几处出入，原诗为七言绝句，二句末位为“若个边”，而图会中所记乃是“碧云洞”三字。推测作者是为应其景而改之以作烘托吧！图文的诗句中还有一个明显的讹误。分明是七言绝句，图诗第三句却只有 6 字，缺一个“别”字，此处只能推断为图会作者誊抄时的笔误。尽管图诗既有缺字之误，又有篡改之嫌，但作者选诗之巧妙，运用之精彩令人感叹。诗文之效在得其时，入其景，能引起读者们共鸣和神思的就是佳作。

五 小结

纵观都名所图会中引用之汉诗文，中国文人及其作品占据大半天下，足见日本人对中国汉诗文的崇敬与喜爱之情。且大部分所引之作能入情入景，引用无疑是成功的。日本人佳作之引用，体现了江户时代日本文人的汉学水平已经趋于成熟，汉文学不再是一个国家独享之物。

同在汉字文化圈成长起来的中国和日本，自古以来受到汉字文化的洗礼和泽被。汉字文化是孕育两国文化共同的土壤。汉诗文作为汉字文化的硕果之一，在这篇土壤上都开出了瑰丽的花朵。

参考文献

竹井俊則 『日本名所風俗図会８（京都巻下）』 角川書店 一九八一

沈 少 康さんは、招聘研究員として、3 月 1 日から 20 日までの間、非文字資料研究センターで研究を行いました。

2009 年度　センター研究員・研究協力者

センター研究員

名　　前	所属部局	職　　名	研究班
福田　アジオ（センター長）	歴史民俗資料学研究科	教授	1,3
橘川　俊忠（副センター長/運営委員<編集担当>）	歴史民俗資料学研究科	教授	2,6
田上　繁（事務局長/運営委員<事務総括担当・編集担当>）	歴史民俗資料学研究科	教授	2
大里　浩秋（運営委員<研究会担当>）	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	1,5
北原　糸子（運営委員<ホームページ・データベース担当>）	立命館大学歴史都市防災研究センター	教授	4
金　貞我（運営委員<研究ネットワーク・資料担当>）	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1,3
小熊　誠	歴史民俗資料学研究科	教授	1
貴志　俊彦	経営学部国際経営学科	教授	5
木下　宏暢	工学研究科電気電子情報工学専攻	教授	2
クリスチャン・ラットクリフ	外国語学部国際文化交流学科	助教	3
佐野　賢治	歴史民俗資料学研究科	教授	2
ジョン・ボチャラリ	歴史民俗資料学研究科 東京大学総合文化研究科超域文化科学専攻	非常勤講師 教授	3
孫　安石	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	5
津田　良樹	工学部建築学科	助教	2,6
能登　正人	工学研究科電気電子情報工学専攻	准教授	4
的場　昭弘	経済学部経済学科	教授	1
安室　知	歴史民俗資料学研究科	教授	2

研究協力者

川西　崇行	早稲田大学教育総合科学学術院	講師	4
君　康道	東京大学大学院総合文化研究科	講師	3
厳　明	獨協大学国際教養学部	特任教授	3
小松　大介	歴史民俗資料学研究科	博士後期課程	2
佐々木　長生	福島県立博物館	学芸課専門学芸員	2
高野　宏康	日本常民文化研究所	特別研究員	4
冨井　正憲	漢陽大学校建築学部	教授	5
富澤　達三	外国語学部国際文化交流学科	非常勤講師	1
中町　泰子	歴史民俗資料学研究科	博士後期課程	1
新国　勇	只見の自然に学ぶ会	代表	2
藤永　豪	佐賀大学文化教育学部	専任講師	6
フレデリック・ルシーニュ	歴史民俗資料学研究科	博士後期課程	2
本田　佳奈	元COE研究員（PD）		6

研究班：
1　非文字資料研究ネットワーク形成研究
2　非文字資料発信システム研究『地域統合情報発信の開発』
3　『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂共同研究
4　関東大震災の都市復興過程とそのデータベース化、並びに資料収集
5　中国・韓国の旧日本租界
6　持続と変容の実態の研究ー対馬60年を事例として

2009 年度　個人研究課題一覧

大里　浩秋	戦前台湾在住日本人関係資料整理
小熊　誠	東シナ海海域地域における非文字資料の比較研究
貴志　俊彦	戦前レコード歌謡のデータベース化
北原　糸子	日本災害史研究
橘川　俊忠	持続と変容の文化史
木下　宏揚	非文字資料の情報発信における情報検索、個人情報保護、著作権管理に関する研究
金　貞我	日本近世絵画における風俗表現
佐野　賢治	民俗資料の文化資源化
孫　安石	中国都市史研究―とくに上海を中心に
田上　繁	非文字資料としての近世検地絵図の収集と解析
津田　良樹	海外神社跡地調査研究
能登　正人	非文字情報の収集と解析

福田　アジオ	民俗資料としての名所図会
ジョン・ボチャラリ	絵巻と民間信仰
的場　昭弘	欧州における非文字資料研究現状調査、非文字資料の活用の理論的研究
安室　　知	微地形の環境認識と景観に関する研究
クリスチャン・ラットクリフ	①中世における和歌の社会的価値と効用 ②中世における蹴鞠の位置や意味 ③芸能専門家としての飛鳥井家

2009 年度　奨励研究者決定

研究課題	氏名（所属）
共同飲食の場で期待される占い菓子の役割 ー石川県と長崎県内の正月習俗を事例としてー	中町　泰子（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
モンゴル族における牧畜儀礼の一環としてのオボー祭祀	那仁　毕力格（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
中国少数民族納西族および回族の 現代における民俗文化についての研究	高倉　健一（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
東西にみる道祖神の現状	鈴木　英恵（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
山東省における医食同源の役割	李　利（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）

受贈資料一覧（書籍・雑誌）（2008 年 4 月～2009 年 6 月）

タイトル	発行所
・「歩み」と「走り」の身体伝承	青森県立郷土館
・Printing Museum News No.30 ～ 32	印刷博物館
・図書館・博物館報　書香　25 号	大谷大学博物館学課程
・かいじあむ通信 kai 第 11 号	かいじあむ山梨県立博物館
・DO DO World ニュース	株式会社　道祖神
・文環研レポート第 26 ～ 27 号 ・Cultivate　№ 32 ～ 33	株式会社　文化環境研究所
・東アジア文化交渉研究　創刊号 ・東アジア文化交渉研究　別冊 1 ・ニューズレター　№ 1（日・英・中・韓　各 1 冊） ・第二回国際シンポジウム　文化交渉学の構築Ⅰ ―‘西学東漸’と東アジアにおける近代学術の形成―	関西大学文化交渉学教育研究拠点 ICIS
・九州産業大学　柿右衛門様式陶芸研究センター論集　第 4 号 ・ニューズレター№ 12	九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター
・水素利用機械システムの統合技術　最終成果報告書（15 ～ 19 年度）	九州大学 21 世紀 COE プログラム「水素利用機械システムの統合技術」
・成果報告書　平成 15 年度ー平成 19 年度	九州大学 21 世紀 COE プログラム 「感覚特性に基づく人工環境デザイン研究拠点」
・漢字と文化　漢字文化の全き継承と発展のために　第 12 号	京都大学人文科学研究所内　COE 拠点事務局
・漢字文化研究年報　第三輯 ・漢字と文化　漢字文化の全き継承と発展のために　第 12 号 ・漢字文化の全き継承と発展のために　報告書 ・オープン・フォーラム「漢字文化の今 5」報告書 ー漢字文化の継承と発展ー	京都大学 21 世紀 COE プログラム 「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」
・ニューズレター № 19,20 ・年次報告書 5 ・市民社会と責任	京都大学大学院法学研究科 21 世紀 COE プログラム 「21 世紀型法秩序形成プログラム」
・地域情報学　NL No.3	京都大学　東南アジア研究所
・Center of Aquaculture Science and Technology for Bluefin Tuna and Other Cultivated Fish	近畿大学 21 世紀 COE プログラム 「クロマグロ等の魚類養殖産業支援研究拠点」
・牛方・ボッカと海産物移入	胡桃沢勘司氏編著・寄贈
・活動報告書　Vol.1　2007 ・Reports on Interdisciplinary Logical Reasoning Studies : Technical Report 1 ・Preliminaries and Backgrounds to the BAROCO-Research on Syllogistic Deductive Inference	慶応義塾大学グローバル COE プログラム 「論理と感性の先端的教育研究拠点」
・神女大史学　第 25 号	神戸女子大学史学会
・高麗美術館蔵品図録 ・李朝染付（資料）	高麗美術館
・滋賀県立大学　人間文化学部研究報告　「人間文化」№ 23 ～ 25	滋賀県立大学　人間文化学部
・ニューズレター№ 10 ～ 11 ・活動報告書　平成 16 年度ー平成 17 年度 ・静岡大学　21 世紀 COE プログラム ナノビジョンサイエンス　画像技術の新展開	静岡大学 21 世紀 COE プログラム 「ナノビジョンサイエンスの拠点創成」
・穂積歌子日記　穂積重行編 ・渋沢研究　創刊号～ 20 号	渋沢史料館
・島田市博物館年報	島田市博物館
・朝鮮通信使 Vol.20 ～ 21	社団法人朝鮮通信使文化事業会
・西北民族研究 57 ～ 60	西北民族大学
・研究報告	千葉県立中央博物館
・民族語文 2008.2, 2008.4, 2008.5, 2008.6, 2009.1, 2009.2	中国社会科学院民族学与人類学研究所
・조선통신사　2008.9, 2008.12	朝鮮通信使文化事業会
・日本文学研究　第 40 号	帝塚山学院大学日本文学会
・SIMOT Research Center Newsletter No.30 ～ 41	東京工業大学　21 世紀 COE プログラム 「インスティテューショナル技術経営学研究」SIMOT 事務室
・グローバル C0E プログラム「風工学・教育研究のニューフロンティア」（日本語版・英語版） ・グローバル C0E プログラム「風工学・教育研究のニューフロンティア」ニューズレター 10,19,20 号	東京工芸大学工学研究科風工学研究センター
・Wind Effects Bulletin Vol.9 ・Wind Effects News Vol.18	東京工芸大学 21 世紀 COE プログラム 「都市・建築物へのウィンド・イフェクト」
・東京大学史料編纂所付属　画像史料解析センター通信第 41 ～ 44 号	東京大学史料編纂所
・平成 15 年度～ 19 年度研究活動報告書	東京電機大学 21 世紀 COE プログラム 「操作能力熟達に適応するメカトロニクス」
・一神教の学際的研究　研究成果報告書 2007 年度 ・CISMOR ワールドウォッチニュース（DVD）　宗教国家アメリカの現在 ・JISMOR 神教学際研究 4（英語版、アラビア語版） ・CISMOR 国際ワークショップ「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」報告書（アラビア語版） ・CISMOR VOICE Vol.8 ・一神教の学際的研究　（平成 15 年度～平成 19 年度） ・CISMOR 国際ワークショップ 2007「イスラームと西洋ーアメリカの外交思想を検証する」 ・第 3 回ユダヤ学会議　「ユダヤ人の言語、隣接文化との歴史的習合」報告書	同志社大学 21 世紀 COE プログラムー神教学際研究センター

・Global Nano-Biomedical Engineering Education and Research Network Centre Annals of nanoBME Vol.1,2008 ・Nano-Biomedical Engineering in the East Asian=pacific Rim Region ・ナノ医工学年報 2007	東北大学グローバル COE プログラム 「新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点」
・遠野物語ゼミナール 2007　講義記録ー『遠野物語』の誕生ー ・遠野物語研究　第 10 号 , 第 11 号	遠野物語研究所
・東京人 10 月号　No.245	都市出版
・かたりべ　88, 89	豊島区立郷土資料館
・平成 18 年度最終成果報告書	豊橋技術大学 21 世紀 COE 拠点形成プログラム 「未来社会の生態恒常性工学」
・報告集 Vol.16 ～ 18,21 ～ 27 ・ニューズレター №14 ～ 17	奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム 「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」
・「雙松通訊」№9 ～ 10	二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム 「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」
・ORCANANA 報告書	日本大学藝術学部
・展示学第 45 号～ 46 号	日本展示学会
・資料室ニュース Vol.33 ～ 37	阪神・淡路大震災記念　人と防災未来センター　資料室
・ニューズレター №16	一橋大学 21 世紀 COE プログラム 「現代経済システムの模範的評価と社会的選択」
・研究成果報告書	藤田保健衛生大学 21 世紀 COE プログラム 超低侵襲標的化診断治療開発センター
・구 일본우선주식회사 인천지점 기록회조사보고서	문화재청（韓東洙氏寄贈）
・21 世紀 COE 国際日本学研究叢書 6　日本学とは何か ーヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究ー ・21 世紀 COE 国際日本学研究叢書 7　国際日本学 ーことばとことばを超えるものー	法政大学 21 世紀 COE プログラム「日本学の総合的研究」
・無声映画鑑賞会会報　活狂 No.134, 135	マツダ映画社　無声映画鑑賞会
・2007 年度報告書	武蔵野美術大学　美術と福祉プログラム
・「科学技術動向」No.84 ～ 98	文部科学省　科学技術政策研究所　科学技術動向研究センター
・学芸員ニューズレター第 21 号	立命館大学文学部
・京都歴史災害研究　第 8 ～ 9 号	立命館大学歴史都市防災研究センター／京都歴史災害研究会

ホームページ INFO　「海外神社（跡地）に関するデータベース」

「海外神社（跡地）に関するデータベース」の増補改訂版を公開いたしました。COE の一環として作成したデータベースをもとに、その内容を充実・改良したものです。『侵略神社』（新幹社）の著者辻子 実氏から、氏が長年に渡って収集された貴重な資料の提供を請けました。それらのうち古絵葉書を中心に 700 点以上のデータを新たに追加することができました。資料の性格から刊行物からの転載にたよらざるを得ないのが実状ですが、絵葉書とはいえ原資料をもとにしたデータを大幅に増補できた点は、このデータベースの大きな前進だと考えております。増補改訂に当たり、トップページのデザインを一新しました（右に掲げた写真参照）。大きな画像の周囲に小さな画像を配するレイアウトにしており、それらの小さな画像が順次大きな画像に入れ替わって行くように設定されています。画像データは、「満洲国」建国忠霊廟・南洋神社・朝鮮神宮・台中神社・樺太神社の「旧」・「新」の画像で構成されています。（津田）

http://www.himoji.jp/himoji/database/db04/

主な研究活動

運営委員会

2008年度

第10回　2月12日・海外提携研究機関招聘研究者の受入れ、今年度海外出張計画、第4回公開研究会（上海ワークショップ）開催、来年度の事業計画　他

第11回　3月 9 日・研究員人事、「機関リポジトリシステム」の概要、「センターホームページ」プレゼン、「グローバルCOE」の申請、浙江工商大学の訪問研究員受入れ、只見町との研究協定更新、データベースの更新・公開　他

2009年度

第1回　4月10日・2009年度予算、研究員人事、事業計画、研究体制、PC環境の更新、GCOEヒアリング　他

第2回　5月20日・研究協力者の委嘱、奨励研究の審査、図書館リポジトリシステムの参加、今年度研究会の企画、海外研究機関との提携　他

第3回　6月17日・神奈川大学学術機関リポジトリへの登録、第1回ワークショップ計画案、全体研究会の実施計画案、2009年度予算の運用　他

研究員会議

第1回　4月10日・2009年度予算、研究員人事、事業計画、事業日程、基幹・個別研究計画、個人研究課題等設定、図書館リポジトリシステム、COEブックレット刊行、GCOEヒアリング　他

研究会

研 究 班

5月15日、6月12日　非文字資料研究ネットワーク形成共同研究・研究会

3月11日、5月20日、6月24日『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂共同研究・研究会

3月3日、4月9日、17日、27日、5月11日、19日、26日　関東大震災の都市復興過程とそのデータベース化共同研究・研究会

現地調査

橘川俊忠、佐野賢治、フレデリック・ルシーニュ、小松大介
奥会津只見町　3月2日～3月3日
インターネット・エコミュージアムに関する報告出張

福田アジオ、金貞我、的場昭弘
オランダ（ライデン博物館他）ドイツ（ハイデルベルク大学） フランス（フランス国立高等研究院、リヨン第3大学） 3月10日～3月22日
海外ネットワーク形成のための情報収集、提携協議

橘川俊忠、津田良樹、本田佳奈、磯貝奈津子
対馬　3月17日～3月21日
持続と変容の実態の研究―対馬60年を事例として

編 集 後 記

センター発足二年目を向かえ、研究・調査活動もようやく軌道に乗り始めました。その活動状況を報告すべく、発行時期も繰り上げました。

表紙に掲載した写真は、明治期の横浜を写した絵葉書です。カラー写真のようになっていますが、色は後から着色したものです。このような絵葉書は、非文字資料としてどのように考えればいいのでしょうか。風景を絵葉書にするという場合、場面の切り取り方やアングルの決め方にパターンがあるように思われますし、着色するということは、錦絵的な感覚が残っているのかもしれません。単なる風景記録写真としてだけではなく、その写真を絵葉書に仕立てていくときに現れる人間の側の意識のあり方を考える資料としても分析の対象になるだろうと思います。今年は横浜開港 150 年でもありますし、こうした資料の活用方法についても考えたいと思っています。

最後に、残念なお知らせです。今年もグローバル COE に応募しましたが、惜しいところで落選となりました。146 件の応募の内、21 件がヒアリングに選ばれ、その中には入りましたが、最終選考を通過することはできませんでした。センターとしては、採否に関わらず、非文字資料の研究の重要性を認識しつつ、与えられた条件の中で調査・研究、若手研究者の育成など、今後も積極的に取り組んでいく所存です。今まで以上のご支援・ご鞭撻、よろしくお願いします。（K）

Information

神奈川大学非文字資料研究センター　2009 年度　第 1 回公開研究会
「震災復興期における都市の文化変容 —モダン文化の諸相と震災の記憶—」

参加無料

- 2009 年 7 月 18 日（土）14：00 ～ 17：00
- 場　所：神奈川大学横浜キャンパス 1 号館 308-1
- 司　会：北原糸子

パネリスト

千葉真智子（岡崎市美術博物館　学芸員）
「関東大震災後の商業美術と都市の風景」

内田青蔵（神奈川大学工学部　教授）
「モダン建築の出現—RC 造アパートメントハウスを中心に」

高野宏康（神奈川大学非文字資料研究センター　研究協力者）
「復興記念館の誕生—震災の記憶のゆくえ」

ディスカッション

- 司会・進行：川西崇行（早稲田大学　講師）

お問合せは、非文字資料研究センター TEL:045-481-5661（内線 3532）

2009 年度第 1 回歴民講演会
「遣唐使：帰国後の待遇について」

- 講　師：シャルロッテ・フォン・ヴェアシュア（フランス国立高等研究院教授）
- 日　時：2009 年 7 月 17 日（金）15：00 ～ 17：00
- 場　所：神奈川大学横浜キャンパス 24 号館（法科大学院棟）B107

お問合せは、大学院歴史民俗資料学研究科 福田アジオ TEL:045-481-5661（内線 4021）

2009 年度第 2 回歴民講演会
「自由民権運動研究の現状と課題」

- 講　師：安在邦夫（早稲田大学　文学学術院　教授）
- 日　時：2009 年 7 月 31 日（金）15：00 ～ 17：00
- 場　所：神奈川大学横浜キャンパス 24 号館（法科大学院棟）B107

お問合せは、大学院歴史民俗資料学研究科　森武麿　TEL:045-481-5661（内線 4080）

神奈川大学日本常民文化研究所　第 82 回研究会
「満州移民の戦後史」

- 日　時：2009 年 7 月 1 日（水）　13：00 ～ 14：30
- 場　所：神奈川大学横浜キャンパス 9 号館 12 号室
- 報告者：森武麿

神奈川大学歴民調査報告第７集
『中設楽の民俗 —愛知県北設楽郡東栄町中設楽—』

- 2009 年 3 月 25 日発行　A 4 判 152 ページ
- 発　行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
- 内　容

花祭で有名な奥三河の村落についての民俗調査報告書。報告編と考察編で構成され、花祭についても詳細に記述している。

神奈川大学歴民調査報告第８集
『渋江公昭家文書目録〔天地元水神社収蔵分〕（三）』

- 2009 年 3 月 31 日発行
- 発　行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
- 内　容

熊本県菊池市の天地元水神社（宮司渋江公昭家）に伝わる文書の目録である。河童信仰を含む水神に関する文書群であり、一部写真を入れて翻刻も行っている。

『海と非農業民 —網野善彦の学問的軌跡をたどる—』

- 2009 年 7 月 24 日発行　A 5 判 256 ページ
- 発　行：岩波書店　編集：神奈川大学日本常民文化研究所
- 内　容

2007 年に行われた第 11 回常民文化研究講座「網野善彦の資料学」における報告や討論をもとに、新たな執筆者を加えて再構成した。

第一章　戦後歴史学と網野善彦
第二章　海への開眼—日本常民文化研究所月島分室での活動
第三章　非農業民の位置づけ—神奈川大学常民研での調査活動
第四章　諸学との交流と葛藤
第五章　資料学への途
付録 CD　「日本列島における海民の移動と移住—中世を中心に」（常民文化研究講座第1回）

神奈川大学日本常民文化研究所　第 1 回調査研究報告会
「東京都中央区立郷土天文館収蔵品の資料調査・整理」

- 日　時：2009 年 7 月 13 日（月）16：20 ～ 17：50
- 場　所：神奈川大学横浜キャンパス 9 号館 12 号室
- 発表者：佐野賢治、因琢哉、内山大介、小林光一郎、佐久間かおる、羽毛田智幸

非文字資料研究　No.22

発　行　日　2009年7月25日 発行
編集・発行　神奈川大学 日本常民文化研究所　非文字資料研究センター
Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University
〒221-8686　横浜市神奈川区六角橋3-27-1
■Tel.045-481-5661　■Fax.045-491-0659　■URL http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/